

商品語の〈場〉は人間語の世界とどのように異なっているか(3)

——『資本論』冒頭商品論の構造と内容——

井 上 康
崎 山 政 毅

はじめに

- 〈I〉人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉
- 〈II〉『資本論』初版と第二版の位相（以上、632号）
- 〈III〉人間語による分析世界としての『資本論』第二版第1章第1節および初版・フランス語版当該部分の比較対照による解説
 - (i) 〈富—価値—商品〉というトリアーデ
 - (ii) 『資本論』初版、第二版、およびフランス語版の対照
 - (iii) パラグラフ①および②の検討
 - (iv) パラグラフ③の検討
 - (v) パラグラフ④の検討
 - (vi) パラグラフ⑤の検討
 - (vii) 「共通なもの」= 価値、「第三のもの」= 商品に表わされた抽象的人間労働
 - (viii) 初版のパラグラフ⑥～⑨の検討
 - (ix) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑥、⑦の検討
 - (x) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑧、⑨の検討
 - (xi) 価値および価値実体の概念の一応の定立（以

上、633号）

- 〈IV〉商品語の〈場〉——価値形態（本号）
 - (i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について
 - (ii) 初版本文、初版付録、および第二版のそれぞれの価値形態論
 - (iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか
 - (iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して
 - (v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して
 - (vi) 価値の実体と等価形態の謎性
 - (vii) 初版本文価値形態論の形態Ⅱに関して
 - (viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して
 - (ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して
- 〈V〉価値形態論と交換過程論との関係について（以下、続く）
 - (i) 価値形態論に対する交換過程論
 - (ii) なぜ、第二版は初版本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか
- 〈VI〉〈富—価値—商品〉への根源的批判について
おわりに

（承前）

〈IV〉商品語の〈場〉——価値形態

(i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について

商品語の〈場〉に入る前に、特殊歴史的規定性を受けた、商品をつくる労働について少し述べておきたい。商品をつくる特殊歴史的な労働は、相互に独立して営まれる私的諸労働であった。この私的労働の特有の社会性が他でもなく諸商品の等置関係・価値関係・交換関係においてはじめて現

われ出てくる。だから私的労働が社会的労働として認められる過程は価値形態論がはじめてこれを示すのである。個々の商品をいくら分析してみてもそれに表わされた労働はあくまで私的労働であって決して社会的労働として認められることはない。だが、それがまさしく商品であるということはそれが他の商品と交換され得るということ、当該商品に表わされた私的労働が他の私的労働と交換され得るということであり、この交換関係においてはじめて商品に表わされた私的労働は社会的労働として認められることになるわけである。だからマルクスは人間語による分析世界においても用意周到に、代表としての異種の二商品の等置関係・交換関係を取り出して分析し、価値と価値実体の概念を一応定立していた。もちろん人間語による分析においては価値表現自体＝価値形態自身を問題にしたわけではない。だから分析的抽象によって導き出された抽象的人間労働はあくまで自然的諸規定・具体的有用的諸規定を抽象した限りでの社会性をもつものであって、それはそのままでは私的労働に対する社会的労働として認められたものとして把握されているわけではない。ただその分析的抽象化が二商品の等置関係から、すなわち相互に交換され得るという社会関係から導かれたことによって、陰伏的に (implicit) その社会性が語られていることになるのである。諸商品に表わされた私的諸労働がまさしく現実的に社会的な労働として、どのようにして認められることになるのかということは、だからこの等置関係・交換関係そのもの・その表現それ自体に立ち戻ることによってのみ示されることになる。

商品に表わされた労働は、あくまで相互に独立して営まれる私的諸労働、社会的分業の自然発生的諸環として全面的に依存し合っているものの、にもかかわらずただ交換によってはじめて実際に社会的総労働の諸環としてそれぞれが実証されるような、相互に独立しそれゆえ直接には依存関係にない私的諸労働である。だからこそ人々にとっては、異種の二商品の等置において、はじめから異種の労働を労働一般＝抽象的人間労働として等置するなどということは可能ではないのであって、二商品を直ちに交換価値にするのである。だから異種の二商品の等置は労働におけるそれではなく、きわめて抽象的な価値における等置であるのだが、しかし価値における等置ということさえ人々は無意識の内に行なうのであって、交換価値という具体的な量的関係に入るのである。

価値形態論が必要になるのは、商品をつくる労働のこのような特殊歴史的な在り様による。リカードゥをはじめとして古典派経済学はこの点をまったく把握してはいなかったのである。彼らは商品を分析して労働を見出し、それによって商品の価値 (実は商品の交換価値) を規定したが、その労働の特殊な在り様については探究することがなかった。相互に独立して営まれる私的諸労働の生産物だけが相互に商品として関係するのであり、この私的な諸労働がどのようにして社会的労働として認められるようになるのかを古典派経済学、そのもっとも優れた学者であるリカードゥでさえ問うことがなかったのである。個々の商品に表わされた労働はあくまで私的諸労働であり、それ自体はそうでしかなくそうであり続ける。ところが、そうした私的なものでしかない諸労働の投下物としての・その凝固としてのそれらの労働生産物が商品として、すなわち価値として認められるということは、それらの私的な労働が社会的な労働として認められるということ、他の様々な種類の労働とも交換可能な社会性をもった労働として認められるということの意味している。私的労働が社会的労働に転化することがいかにして可能であるのか、——この問いがリカードゥにあってさえ問われなかったということである。ところが一方、現実の商品世界にあっては貨幣が既に存在し、貨幣以外のすべての労働生産物が貨幣との交換関係に入ることによって商品として相互に交換されることとなっている。だから一見すると他でもなく貨幣によってこそ、あらゆる労働生産物は商品に転

化するかのように見える。しかし貨幣もまた一つの特定の労働生産物であり商品である。かくしてなぜ貨幣があるのかを問う必要があるのである。つまり、私的労働が一体いかにして社会的労働に転化されるのかを解き、この転化の形態の完成した姿として貨幣（貨幣形態）を捉えるということが問われるのである。任意の商品に表わされた私的労働が一体どのようにして社会的労働に転化するのか、すなわち、どのようにして他のどんな私的労働とも交換可能な形態を得るのか、そしてその転化の完成形態として貨幣形態を把握するということが問われるのである。こうして「すべての商品の貨幣存在」が十全に解かれることになり、貨幣の秘密が明らかになる。

私的労働の社会的労働への転化を解くためには、議論を諸商品が現実運動する〈場〉、すなわち、諸商品の交換関係の〈場〉において展開しなければならない。少なくとも二商品の交換関係・等置関係が対象として措定されなければならない。

では、リカードゥが行なったことは結局、どういうことであったのか。リカードゥは、商品の価値をそれに投下された労働によって規定されるものとして掴んだが、彼はその商品に投下された労働を、多くの商品の集合から、もしくはそれらの中から代表として取り出したただ一つの商品から分析的に抽象化して析出したのであって、だからリカードゥの価値（実際は交換価値）概念は、単なる分析的な抽象概念であり、しかも商品に投下された種々様々の具体的な私的諸労働を労働一般へと抽象化することで得られた抽象概念である。だからその抽象化は、マルクスの分析的抽象化とは決定的に異なっている。マルクスの場合、代表として採られた異種の二商品の等置関係から分析的抽象化が行なわれたのであり、だからそこで得られた抽象的人間労働は、労働の自然的諸規定・具体的有用的諸規定が抽象化されたものとして、明確に〈自然的－社会的〉関係における社会性への抽象化が遂行されたものとしてあった。かくしてそれは、〈私的－社会的〉関係における社会性をも陰伏的に（implicit）含み込んだものとしてあった。これに対してリカードゥの場合は、多くの商品もしくは単一の商品に投下された諸労働の労働一般への抽象化が思惟抽象によって遂行されただけであり、だからそれによって得られた労働一般は単なる抽象的な観念像でしかなく、〈自然的－社会的〉関係における社会性さえも明確には含み込んでいない抽象概念であり、ましてや〈私的－社会的〉関係における社会性からは切り離されたものであった。それゆえリカードゥの場合、そこから社会的労働へと至る理路は存在しない。マルクスの場合、再び異種の二商品の等置関係に立ち戻り、その価値表現・表現様式を問題とすることによって、〈私的－社会的〉関係における社会性を捉えることができたのであるが、リカードゥの場合はそこへ向かう理論的な道筋がないのである。このことは、古典派経済学のリカードゥたちが、商品に表わされた労働を二重性において捉えることができなかつたことと正確に照応している。

〈私的－社会的〉関係における社会性は、そもそも分析的抽象化によっては得られるものではない。人間語による思惟抽象によって得られるものではないのである。だから、マルクスが行なったように、最初から異種の二商品の等置関係を代表として措定し、それをまずは分析的に抽象化して抽象的人間労働を一旦導いた上で、改めてその等置関係に立ち戻り、その表現形態・表現様式自体を取り上げる必要があるのである。一旦分析的抽象化によって得られた抽象的概念を諸商品の等置関係・価値関係へと返し、諸商品の現実の運動においてその抽象化が実現される過程に立ち戻ることによってはじめて、私的諸労働の社会的労働への転化の過程を捉えることができるのである。なぜなら諸商品の等置関係そのものにおいて、したがって価値形態においてこそ、私的労働の社会的労働への転化が成し遂げられるからである。諸商品の運動自体がそれを成し遂げるのであって、だから

人間語による思惟は、商品語の〈場〉に立ち向かい、その〈場〉の運動を見・聴き取ることが求められるのである。しかも、この私的労働の社会的労働への転化は、議論の先取りになるが、形態Ⅱ（展開された価値形態）でも形態Ⅲ（一般的価値形態）でもなく、価値形態のもっとも原初的形態である形態Ⅰ（単純な価値形態）において解明されなければならない。なぜなら、どのような労働生産物でも商品になり得ること、どのような私的労働でも社会的労働に転化できること、すなわち、「すべての商品の貨幣存在」を解き明かすことが求められているからである。一般的価値形態における一般的等価形態にある一般的等価物はもちろん、形態Ⅱ（展開された価値形態）における相対的価値形態にある商品もすでに他のすべての商品と異なる特別な形態における商品になっているからである。形態Ⅰ（単純な価値形態）における等価形態にある商品、つまり相対的価値形態にある商品とだけ異なるものとして、どのような商品もその位置に座り得るその等価物こそが貨幣の原基的・原初的形態であることが明らかにされなければならないのである。これが明らかにされることによって、価値形態—貨幣形態の秘密を暴き出すことができる。『資本論』初版でそれはなされた。しかしそれは単純な思惟活動の結実ではない。人間の分析的思惟、その抽象作用の単純な適用・駆使によってそれはなしうることはないからである。

(ii) 初版本文、初版付録、および第二版のそれぞれの価値形態論

『資本論』の価値形態論には周知のように三つのバージョンがある。初版本文、初版付録、そして第二版の各価値形態論である。これら三つの価値形態論をどのように捉え扱ったら良いであろうか。

基本的に初版本文テキストを主テキストとし、第二版を比較対照テキスト、更に必要に応じて初版付録を参照テキストとすれば良いとわれわれは考えているが、三つの版の比較から以下のことが言える。

- (1) 初版本文には貨幣形態が含まれてはいないが、初版付録および第二版では形態Ⅳとして貨幣形態が論じられている。しかも共に一般的等価物としての完成形態である金を用いてそれが論じられている。
- (2) 初版本文の形態Ⅳは形態Ⅱ（展開された価値形態）における相対的価値形態の位置にあるリンネル、形態Ⅲ（一般的価値形態）における一般的等価形態の位置にあるリンネルに他のいかなる商品も代替し得ることを示したものであるが、この初版の形態Ⅳは初版付録および第二版では省略されている。
- (3) 初版本文は相対的価値形態から見た価値形態論となっているが（この点は形態Ⅰから形態Ⅲがすべて「相対的価値の〔…〕形態」となっているところに良く示されており、初版付録以降、これは継承されていない）、初版付録はその点が少し弱まっている。更に第二版では相対的価値形態と等価形態の双方を全体として見るものとなっている（ここで「見る」というのはマルクスの学的思惟が「見る」のである。というのは、価値形態論ではあくまで商品語の〈場〉が問題であって人間語の世界が問題ではないとはいえ、商品語を聴き取り・註釈・翻訳するマルクスの学的思惟が介在しているのは当然だからである）。
- (4) 初版付録は非常に細かな区分・項目が立てられ、しかもそれらにそれぞれの内容を示す見出し等が付せられており、マルクス自身も言うようにきわめて「学校教師的に説明する」体

裁のものになっている。それゆえ、もっとも弁証法が強く働く価値形態論であるにもかかわらず形式論的理解を許容する危険性を内包している。

以上三つの版の価値形態論の比較からわれわれは初版本文のものを主テキスト、第二版のものを比較対照テキスト、初版付録を補足・参照テキストとする⁶⁸⁾。その理由は以下である。

価値形態論の課題は何よりも労働生産物がどのようにして現実的に商品になるのか（商品形態をとるのか）を示すことである。そしてこのことは「すべての商品の貨幣存在」を明らかにすることである。ある何らかの一労働生産物が現実的に商品になるのは、それと異なる種類の労働生産物たる商品との交換関係・価値関係・等置関係に入ることによってである。つまり、他の異種の商品を等価物として（等価形態として）自分に等置し、自らはこの関係の中で相対的価値形態を取ることである。したがって、価値形態論の果たすべき課題からすれば、あくまで相対的価値形態の方から見て、まずは論理的にあり得るすべての価値形態について、商品形態としての社会性の水準の低いものから高いものへと見ていくことが求められるのである。だからこのことは、純論理的に言った場合の最高の価値形態である一般的価値形態における一般的等価物にあらゆる商品が位置できることを示すことなのである。このことが「すべての商品の貨幣存在」を解くことであることは言うまでもない。これらの点から言って、初版本文の価値形態論こそが、他の二つのもの——初版付録と第二版の価値形態論——に対する論理上の優位性を占めていることが判る。初版本文の価値形態論はあくまで相対的価値形態から見たものとなっており、また「形態Ⅳ」として一般的価値形態における一般的等価物の位置に任意の商品が位置し得ることが示されているからである。また更に、価値形態論で貨幣形態について解いていないことも初版本文の価値形態論が論理的に他の二つに対して優位にあることをはっきりと示している。三つの価値形態論のいずれも第三の価値形態として一般的価値形態を取り上げているわけだが、ここで一般的等価形態に位置する一般的等価物たる一商品が、貨幣商品としての金に転化・固定化する事態は、決して純粋に論理的に解き得ることではなく、現実的な歴史的諸過程に拠るものだからである。論理的に言って、あらゆる商品が一般的等価物になり得ること、このことを示すことこそが「すべての商品の貨幣存在」を明らかにすることであり、貨幣の秘密を解くことであり、初版本文はその課題を果しているのだが、他の二つのものはこのことを改めて確認しないままに貨幣形態について述べてしまっているからである。特定の商品である金に一般的等価物が固着する過程は、決して純論理的に解き得ることではなく、現実的な歴史過程によるのであって、これは交換過程論の課題なのである。初版本文は価値形態論から交換過程論への接続がきわめて論理的で無理なくなされているのに対して、初版付録および第二版では価値形態論で貨幣形態についても解いてしまっており、しかも貨幣形態を先に解いたにもかかわらず、交換過程論は初版からの書き換えをほとんど行なっておらず（核心部分ではまったく書き換えを行なっていないと言って良い）、その論理的接続に無理が生じているからである⁶⁹⁾。

以上から、価値形態論については初版本文を主テキストとしなければならないことがわかる。ただ、初版本文の価値形態論にも欠陥がないわけではない。というのは、先に見たように、初版は価値を前提にして、あるいは仮言的に措いて論じていたのであり、このことが価値形態論においても影響しているからである。諸商品が商品語で語る事柄を聴き取りそれを人間語に翻訳した注釈するという面で、あくまで人間語の世界におけることではあるが、論理の緻密さに欠けるところがあるし、また叙述の丁寧さなどの点では明らかに第二版の方が優れているところがある。こうした初

本文の価値形態論の欠陥は、いわゆる「回り道」の議論（後に詳述）にはっきりと現われている。この点に留意しつつ初本文を主テキストとして考察していくことになる。

次いで、第二版と初版付録の扱いに関して述べる。両者は共に、初本文の価値形態Ⅳを捨て、形態Ⅳを貨幣形態としている。最後の形態である形態Ⅳを貨幣形態にすることによって、形態Ⅰ（単純な価値形態）から形態Ⅳ（貨幣形態）へと至る価値形態の発展という論理的筋道が敷かれたことになり、価値形態全体が貨幣の必然性とその創出を解くものとなった。この点では初版付録よりも第二版の方がはるかに徹底しており、形態Ⅰから形態Ⅳへの発展過程が歴史的過程として描き出されている。これに対して初版付録では歴史的発展過程という一貫した叙述にはなっていない。貨幣形態自体の扱いにそれ程の重点が置かれているとは言えない。またそもそも初版付録はあくまで本文に対する付録であり、何よりも重点は平易化にある（以上の詳細な分析は、次章〈Ⅴ〉の(ii)で行なう）。こうして、初本文と第二版とが対極的な位置にあり、初版付録がその中間に位置するということがわかる。

以上からわれわれは、第二版を初版に対する比較対照テキストとし、初版付録を参照テキストとする。

ではいよいよ商品語の〈場〉に入っていこう。

(iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか

形態Ⅰとしての「相対的な価値の第一の、または単純な形態」、「それが単純であるがゆえに、分析するのが困難なもの⁷⁰⁾」とマルクスの言う第一の形態をこそ見ていくことが重要である。

価値表現: 20 エレのリンネル = 1 着の上着 (a 量の商品 A = b 量の商品 B) が取り上げられる。この等式は、労働生産物である 20 エレのリンネルが、自分が商品であることを示すために形成されたものである。だからこの等式は数学における等式とは異なっている。等式の両項を入れ換えると意味が違って来るからである。この点については既に〈Ⅲ〉における註 47) で述べておいたが、再度確認のため触れると、初版第 1 章の「(1) 商品」冒頭、それに対応する第二版第 1 章第 1 節における等置式〈1 クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄〉と上記の価値形態Ⅰの等置式〈20 エレのリンネル = 1 着の上着〉との相違として理解される。前者、すなわち冒頭商品論の出だしにおける等置式は、単に相異なる任意の二商品が相互に交換される、ということを示したものであり、左右両辺を入れ換えてもその意義に変化はない。その限りでこの等置式は数学における等式と同じである。あくまで異なる任意の二商品が等置されているだけなのである。これに対して価値形態論における形態Ⅰの等置式は、任意でかまわないが、何らかの商品が自らを現実的に商品として示すためのものであって、その目的のために自分と異なる任意の商品を自分に等置しているのである。それゆえこの目的を前提とする限り、左右両辺を入れ換えることはできない。左右両辺の二商品はそれぞれ異なった役割を担っているからである。かくしてこの等置式は数学の等式と異なるわけである⁷¹⁾。

この点に注意して先に進もう。20 エレのリンネルは自分に 1 着の上着を等置する。この関係において「リンネルは、ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」⁷²⁾とマルクスは言う。これがまさしく商品語の〈場〉の特有の在り様だ。商品語の〈場〉は線形時空をなしてはいないということだ。一挙に多くのことが語られ実現される。人間語の世界ではこうはいかない。人間語の世界においては話し言葉もまた書き言葉もあくまで線形 = 線状であり、線的な時間順序に従って言語空間が形成・展開される。商品語の〈場〉はこれを超出している。

更に言えば、商品語の〈場〉においては分節化が行なわれないということである。価値関係という関係そのものが、一挙に多くのことを、また人間語の世界では線形な論理的時間順序に関わるところを、いわば無時間的もしくは多層時間的に商品語で語るわけであって、人間語の世界のように対象世界を線形時空の内に分節化して語るのではないということである。

このように考えてくると、商品語そのものではなく商品語の〈場〉を対象とする以外にはないということ、商品語の〈場〉という特有の〈場〉の運動を捉える必要があるということになる。

では、「ひとたたきで、いくつもの蠅を打つ」というリンネルの語るところをマルクスはどのように聴き取り註釈しているか。

リンネルは、他の商品_を自分_に価値_{として}等置_{することによって}、自分_を価値_{として}の自分_{自身}に_{関係}させる。リンネルは、自分_を価値_{として}の自分_{自身}に_{関係}させること_{によって}、同時に自分_を使用_{価値}として_の自分_{自身}から_{区別}する。リンネルは自分の_{価値}の_{大きさ}——そして_{価値}の_{大きさ}は_{価値}一般_と量的_に計_{られた}価値_との_{両方}である——を_{上着}で_{表現}すること_{によって}、自分の_{価値}存在_に自分の_{直接的な}定在_{とは}区別_{される}価値_{形態}を与える。リンネルは、こうして自分_を一つの_{それ自身}において_{分化}した_{もの}として_{示す}こと_{によって}、自分_をはじめ_て現実_に商品_{——同時に}価値_{でもある}有用な物〔Ding〕_{——として}示_すのである。⁷³⁾

これが初版本文の回り道の議論であるが、きわめて難解である。これを更に敷衍してマルクスは次のように言う。

ある商品の、たとえばリンネルの、現物形態は、その商品の価値形態の正反対物であるから、その商品は、ある別の現物形態を、ある別の商品の現物形態を、自分の価値形態にしなければならない。その商品は、自分自身にたいして直接にすることができないことを、直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分自身にたいして、することができるのである。その商品は自分の価値を自分自身の身体において、または自分自身の使用価値において、表現することはできないのであるが、しかし、直接的価値定在としての他の使用価値または商品体に関係することはできるのである。その商品は、それ自身のなかに含まれている具体的な労働にたいしては、それを抽象的な人間労働の単なる実現形態として関係することはできないが、しかし、他の商品種類に含まれている具体的な労働にたいしては、それを抽象的な人間労働の単なる実現形態として関係することができるのである。そうするためにその商品が必要とするのは、ただ、他の商品_を自分_に等価物_{として}等置_{する}、ということだけである。⁷⁴⁾

初版では価値が前提され、もしくは仮言的に措かれて論じられていることが、上の二つの引用にもはっきりと現われている。価値関係・等置関係が価値におけるものである点にそくして回り道の議論がなされており、その後で、補足的に労働に関して述べている。つまり、商品リンネルは自分が価値であることを示すために他の商品を価値物として自分に等置し、その商品自体を自分の価値の形態にし、これに等しいものとしてはじめて自分もまた価値であることが示されるという点に回り道を見ている。その上で労働に関して述べるわけだが、論理的な連関・文脈が鮮明ではない。労働生産物が価値をもち商品になるのは、抽象的な人間労働がそれに対象化・表わされるかぎりでのこ

とであるが、この論理関係が曖昧になっているのである。これに対して第二版では次のようにマルクスは言っている。

上着が価値物としてリンネルに等置されることによって、上着に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等置される。ところで、たしかに、上着をつくる裁縫は、リンネルをつくる織布とは種類の違った具体的労働である。しかし、織布との等置は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。このような回り道をして、次には、織布もまた、それが価値を織るかぎりでは、それを裁縫から区別する特徴をもってはいないということ、つまり抽象的人間労働であるということが、言われているのである。ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自の性格を顕わにするのである。というのは、この等価表現は、異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を、実際に、それらに共通なものに、人間労働一般に、還元するのだからである。／しかし、リンネルの価値をなしている労働の独自の性格を表現するだけでは、十分ではない。流動状態にある人間の労働力、すなわち人間労働は、価値を形成するが、しかし価値ではない。それは、凝固状態において、对象的形態において、価値になるのである。リンネル価値を人間労働の凝固として表現するためには、それを、リンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品とに共通な「対象性」として表現しなければならない。[リンネルと交換され得るものとしての等価物たる上着が「価値の存在形態として、価値物として、認められている」、すなわち、抽象的人間労働の単なる凝固物として認められていることによって、そしてそれと等しいものとしてリンネルが存在していることによって、その] 課題はすでに解決されている。⁷⁵⁾

このように第二版では、異種の労働生産物の等置がまず何よりも、異種の諸労働の結実の等置であり、これら双方の諸労働の等置であることから議論が始められている、つまり、抽象的人間労働に関して回り道ということが語られている。先の人間語による分析的抽象において、異種の二商品の等置から、それらの二商品に表わされた双方の諸労働が抽象的人間労働に還元され、その抽象的人間労働の凝固体として二商品が価値であること、かくして価値において等置がなされていることが示されていたわけだが、この議論に照応した形で商品語の〈場〉における事態を註釈しているわけであり、こちらの議論の方が解り易いし、論理的にも——これは言うまでもなく人間語の世界のことであり、商品語の〈場〉にこの“論理的”であるかどうかをそのまま当てはめることはできないのだが——緻密で正確である。ただし、相対的価値形態にあるリンネルこそが自らを商品として示す価値関係である点が少しぼやけるように思われる。つまり、具体的有用的労働から具体性有用性を抽象化して抽象的人間労働を析出する過程と、異種の二商品の等置が価値におけるものであることをどのように叙述するのかの困難がここにも現われ出ているわけである。商品語の〈場〉と人間語の世界との絶対的な区別がここにも顔を出しているようである。人間語による翻訳・註釈がいかにも困難であるのかが解る。

また、等置関係における量の規定性について、初本文ではそれを含み込んだままで議論がなされている。商品語についての註釈で、「価値の大きさ——そして価値の大きさは価値一般と量的に計られた価値との両方である」と述べていたことにこのことがはっきり示されている。商品語の〈場〉にそくして言えば当然こうならざるを得ない。しかし、人間語の世界では価値形態・価値表現それ

自体に注目することがきわめて困難で、古典派経済学の学者たちはすべからくこの形態そのものに着目することなくただちにその量的関係に目を奪われていた。この点を考慮してマルクスは第二版ではまずは量的規定性を捨象して考えるべきだと言う。

一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちどのようひそんでいるかを見つけだすためには、この価値関係をさしあたりまずその量的な面からはまったく離れて考察しなければならない。人々はたいていこれとは正反対のことをやるのであって、価値関係のうち、ただ、二つの商品種類のそれぞれの一定量が互いに等しいとされる割合だけを見ているのである。人々は、いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されるようになるということを見落としているのである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、したがって通約可能な大きさなのである。⁷⁶⁾

この点でも第二版の方が論理的に緻密であり（再度述べるが、このこと自体、人間語の世界に固有に要求されることだが）、理解を容易にするものとなっていると言える。だが、ここでは敢えて初版本文に立ち戻り、自らを商品として示したいリンネルの「ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」振る舞いについて詳しく跡付けておこう。一労働生産物は一体どのようにして現実的に商品になるのか、またそのためになぜ価値関係・等置関係に入らなければならないのかを明確にするためである。

出発は一労働生産物であるリンネルが、自らを商品として示そうとするところにある。マルクスはリンネルの語る商品語を聴き取り、その言わんとするところを解説して言う。

価値としては、リンネルはただ労働だけから成っており、透明に結晶した労働の凝固をなしている。しかし、現実にはこの結晶体は非常に濁っている。この結晶体のなかに労働が発見されるかぎりでは〔…〕その労働は無差別な人間労働ではなく、織布や紡績などであって、これらの労働もけっして商品体の唯一の実体をなしているのではなく、むしろいろいろな自然素材と混和されているのである。リンネルを人間労働の単に物的な〔dinglich〕表現として把握するためには、それを現実に物〔Ding〕としているところのすべてのものを無視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容もない人間労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性であり、一つの思考産物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。⁷⁷⁾

この「思考産物」＝「頭脳織物」なるものは、人間語による分析的抽象の一結果であり、その理路の結実である。それはあくまで抽象的な観念像である。

ところが、諸商品は諸物象〔Sachen〕である。諸商品がそれであるところのもの、諸商品は物象的に〔sachlich〕そういうものでなければならない。言い換えれば、諸商品自身の物象的な〔sachlichen〕諸関係のなかでそういうものであることを示さなければならない。リンネルの生産においては一定量の人間労働力が支出されている。リンネルの価値は、こうして支出されている労働の単に対象的な反射なのであるが、しかし、その価値はリンネルの物体において反射されているのではない。⁷⁸⁾

リンネルは単なる「思考産物」＝「頭脳織物」であることはできない。純粹に社会的な抽象性である価値は、単に思惟のうちにある抽象的観念像のままではいかなない。それは対象的な形態、物象的な姿をとって現出しなければならない。しかし、リンネル価値が当のリンネル物体において反射されるなどということはある得ない。なぜなら価値は純粹に社会的であり、リンネル物体はどこまでいってもリンネル物体でありつづけるしかないからである。社会性は社会関係においてあるのであり、だから社会関係においてしか現われない。

かくして労働生産物リンネルは、自らが価値物、すなわち商品であることを示すために、自らと異なる何らかの商品を自分に等置することが必要であったのである。ここでの例では上着を自分に等置していた。

[リンネルの] 価値は、上着にたいするリンネルの価値関係によって、顕現するのであり、感覚的な表現を得るのである。リンネルが上着を価値としては自分に等置していながら、他方同時に使用対象としては上着とは区別されているということによって、上着は、リンネル・物体に對立するリンネル・価値の現象形態となり、リンネルの現物形態とは違ったリンネルの価値形態となるのである。[…] / […] [この価値関係においては] 上着はただ価値または労働凝固体としてのみ認められているのではあるが、しかし、それだからこそ、労働凝固体は上着として認められ、上着はそのなかに人間労働が凝固しているところの形態として認められているのである。⁷⁹⁾

このようにリンネルは他の異種の商品（ここでは上着）を自分に等置することによってはじめて現実的に商品になる。かの回り道について言えば、位相の異なる二つの回り道が相互に関係しつづけば同時に辿られるわけである。ただ、論理的に言えば、商品に表わされた抽象的人間労働が価値の物的根拠であり、だからこそ、この抽象的人間労働に関する回り道を根拠にして価値としての回り道があるのではあるが。ともあれこの構造を人間語によって論理的時間順序に従い叙述するにはそもそも無理がある。

では次に、以上のマルクスによる商品語の聴き取り・註釈を踏まえて、価値と価値実体の概念がまさしくこの価値形態論で確定すること、つまり商品に表わされた抽象的人間労働の社会性が〈自然的—社会的〉関係におけるものだけでなく、〈私的—社会的〉関係におけるものでもあることがどのようにして商品たち自身の関係のうちで実現されるのかについてより詳細に見ていこう。人間語の世界ではこういう手続きを経ないと事態を正確に把握できないから。

(iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して

商品 A (リンネル) が商品 B (上着) を自分に等置することによって、商品 B に表わされている労働が商品 A に表わされている労働に等置される。商品 B を作る労働は当然ながら商品 A を作る労働とは異なっている。しかし商品 B をつくる具体的労働がそれと質的に異なる商品 A をつくる具体的労働と等置されることになるがゆえに、まず B を作る労働の、その具体性有用性・自然的規定性が抽象化されて、双方の労働に共通な質である人間労働に還元される（この過程を〈自然的規定性の抽象化〉過程と呼ぼう）。論理的に言えばこのことの上で、商品 A をつくる具体的労働もまた人間労働に還元された商品 B をつくる労働と等しいとされる限りで抽象化され、人間労働に還元される。こう

して、商品 B を作る具体的労働がこの抽象化された人間労働として意義をもち、商品 B に表わされた具体的有用労働はそのままで対象化された・凝固としての抽象的人間労働の実現形態になる。かくして商品 B は、そのあるがままの姿で、すなわち現物形態のままで、かかる抽象的人間労働の対象化された物・凝固物として意義を持つものとして存在していることになり、商品 A と直接に交換され得るものたる商品 B はその現物形態のままで、端的に価値物であることが示されている。つまり商品 B は価値の現象形態になる。その上で、商品 A は、商品 B と異なる現物形態にありながら、端的に価値物として・ただそれだけの意義を持つ存在物である商品 B と等しい物であることにおいてやはり価値物であること、つまり、その価値を形成する限りで、商品 A を作る労働も抽象化された人間労働であり、その凝固物として商品 A が存在することが示されている。こうして商品 A は、使用価値（現物形態）としては商品 B と異なるものでありながら、商品 B と等しい限りで抽象的人間労働の凝固物であり価値であること、つまり商品であることが示されている。だが実は、ここでは〈私的労働の社会的労働への転化〉がどのようになされたかが説明されていない。現実にはいま述べてきた過程のうちにそれは果たされているのであるが、人間語による解説としてはこれを一体的に明示的に述べることは不可能である。したがってこれについては項を改めて解説する。

さて、この価値関係の中では、商品 B はそのあるがままの姿で・現物形態で、価値を表わすもの・価値形態になっている。価値体・人間労働の物質化として現われているこの商品 B と等しいものとして、商品 A は自分の価値を自分の使用価値と異なる商品 B の体・使用価値で表す。ここまでくれば、この価値関係に量的規定を入れて捉えることも困難ではなくなる。

以上見てきた〈自然的—社会的〉関係における社会性について考えてみよう。人間語による分析、思惟抽象とはまったく位相の違った過程がここにある。

思惟抽象・論理的抽象と、二商品の価値関係における現実的抽象とはいかに異なっているか。先に見たように、マルクスはまず人間語の世界において、二商品の交換関係を表わす等式を分析し、それが一体何を表わしているのかを探り、両商品を抽象的人間労働にまで抽象化した。その上でマルクスは、そのような抽象的人間労働の凝固物として両商品は価値であると指摘した。等式が表わしている内実を分析的に抽象化し別括していく過程があったわけである。現実の価値関係における抽象化はこれとはまったく違っている。商品 A が商品 B を自分に等値するというその現実そのものが、一挙に自然的規定性の抽象化を成し遂げ、その結実を表現する。商品 A が商品 B を自分に等置するというその事実そのものが、商品 B を生み出す具体的労働の具体的有用性・自然的規定性を抽象するのであり、その具体的労働を抽象化された人間労働の実現形態にし、かくしてこの等置関係そのものが、商品 B に表わされた具体的有用労働そのものを抽象的人間労働の現象形態とし商品 B をその凝固態とする。かくして商品 B を現物形態のままでその抽象化された人間労働の凝固物として意義をもつものとし、商品 B をかかる抽象的人間労働の凝固物として、現物形態（使用価値形態）のままで価値体とする。つまり商品 B は価値の実現形態・現象形態になる。要するにここでは商品 B を作る具体的労働、その具体的労働の凝固形態、商品 B の使用価値形態＝現物形態という一連の具体的形態が抽象的なものの実現形態になるという抽象化が起こるわけである。これを抽象化という概念で語って良いものかどうか躊躇せざるを得ない。思惟抽象ならば、思惟によって抽象化されたある観念が抽出されるだけなのであるが、現実的抽象の場合、抽象物が現実には抽象物として存在するわけにはいかないので、抽象物もまた対象的な形態で、すなわち現実の存在物として自己を表現しなくてはならない。ここでは、厳として存在しつづける現物形態、つまり現実の物質あるいは事柄

そのものが、そのままの姿態が、抽象化されたものとして意義を持つのであるから（ここで注意！現物形態の内的属性の一つとして抽象化されたものがあるわけではない）、現実のあるがままの存在が、抽象的なものの実現形態にならざるを得ないのである。

以上が商品 B の側に起こった抽象化である。これに対して商品 A ではどうなるか。商品 A は商品 B と異なる物＝異なる使用価値でありながら、商品 B が現物形態のままに抽象的人間労働の体化物・凝固物であり、かくして価値である、その商品 B と等しいことによって、同じく価値であり、また自分に対象化されている労働が抽象的人間労働であり、価値を生み出すものである限りで商品 A を作る労働もまた単なる人間労働であることとなる。つまりここでは、商品 B の側の現物形態への反射・顕現という形で抽象化が行なわれているのである。ここにもまた、抽象化という概念の適用に躊躇させるものがあるが、しかし現実的抽象のこれまた一方のあり方なのである。

価値関係における現実の抽象化過程、すなわち現実の価値関係における〈自然的規定性の抽象化〉過程は、今見てきたものであるが、具体的なものが抽象的なものの実現形態になるということ、しかもそれが実際に生起するということが、分析的思惟には非常に捉え難い。具体的なものを抽象化していくのが分析的思惟の自然な理路なのだから。もちろんヘーゲルに典型的なように、具体的なものを抽象的なものの実現形態であると観念の中で私念することはできるが、しかしあくまで現実の過程においてそれを理解することは大変難しい。だからマルクスは初版本文において言う。

われわれは、ここにおいて、価値形態の理解を妨げるあらゆる困難の噴出点に立っているのである。商品の価値を商品の使用価値から区別するということが、または、使用価値を形成する労働を、単に人間労働力の支出として商品価値に計算されるかぎりでのその同じ労働から区別するということが、比較的容易である。商品または労働を一方の形態において考察する場合には、他方の形態においては考察しないのであるし、また逆の場合には逆である。これらの抽象的な対立物はおのずから互いに分かれるのであって、したがってまた容易に識別されるものである。商品にたいする商品の関係においてのみ存在する価値形態の場合はそうではない。使用価値または商品体はここでは一つの新しい役割を演ずるのである。それは商品価値の現象形態に、したがってそれ自身の反対物に、なるのである。それと同様に、使用価値のなかに含まれている具体的な有用労働が、それ自身の反対物に、抽象的人間労働の単なる実現形態に、なる。ここでは、商品の対立的な諸規定が別々に分かれて現われるのではなくて、互いに相手のなかに反射し合っている。⁸⁰⁾

このようにして商品 B の側、すなわち等価形態においては、具体的なものが抽象的なものの実現形態・現象形態になるわけであるが、論理的には、これは明らかに奇妙であり転倒している。抽象化された人間労働なるものが、商品 B を作る具体的労働において自らを定立し、人間労働の抽象的な凝固態なるものが商品 B に対象化された具体的有用労働において自らを定立するというわけであり、また価値という抽象的なものが、商品 B の現物形態＝使用価値において自らを定立するというわけであるから。マルクスは初版付録の価値形態論でこれについて次のように述べている。

価値関係およびそれに含まれている価値表現のなかでは、抽象的一般的なものが具体的なものの、感覚的現実的なものの、属性として認められるのではなくて、逆に、感覚的具体的なもの

が抽象的一般的なもの単なる現象形態または特定の実現形態として認められるのである。たとえば等価物たる上着のなかに含まれている裁縫労働は、リンネルの価値表現のなかで、人間労働でもあるという一般的な属性をもっているのではない。逆である。人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または特定の実現形態として認められるだけなのである。[...] / この転倒によってはただ感覚的具体的なものが抽象的一般的なもの現象形態として認められるだけであって、逆に抽象的一般的なもの具体的なものの属性として認められるのではないのであるが、この転倒こそは価値表現を特徴づけているのである。それは同時に価値表現の理解を困難にする。もし私が、ローマ法とドイツ法とは両方とも法である、と言うならば、それは自明なことである。これに反して、もし私が、法というこの抽象物がローマ法においてとドイツ法においてと、すなわち、これらの具体的な法において実現される、と言うならば、その関連は不可解になるのである。⁸¹⁾

このようなまったく奇妙な論理的転倒が現実には生じているのだ。等価形態の、この不可解さはどうして生じるのかと言えば、等価形態が形成されるからである。ではなぜ等価形態が形成されるのかと言えば、商品の価値関係があるからである。そして商品の価値関係がなぜあるのかと言えば、商品生産社会では人間の社会的関係が商品の価値関係としてしかありえない、つまりこの社会では、類としての人間の社会性が、商品－商品関係に現われる転倒した社会性としてしかないからである。

こうした奇妙なこと・転倒は、自然物としての労働生産物 A や B に生じていることではない。人間の社会的関係、すなわち商品 A と商品 B の価値関係において生じていることである。人々の社会的関係がこうした転倒として存在しているのである。資本制生産社会における転倒性はこのようなまでに徹底的である。だが、繰り返しになるが、具体的なものを抽象化していくのが人間の分析的思惟の自然な理路であるので、普通はこの転倒を人々は理解できない。せいぜい錯視を云々するぐらいである。だが、人々は現実の日々の社会的行為においてこの転倒を生きているのである。

(v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して

では次に、〈私的—社会的〉関係における社会性（これを〈私的労働の社会化〉過程と呼ぼう）が現実の価値関係でどのように遂行されるのかを見ておこう。

〈商品 A = 商品 B〉（商品リンネル = 商品上着）という価値関係においては、商品 B は商品 A と直接に交換され得るものとして存在している。つまり商品 B はそのあるがままの姿で直接的交換可能性 (unmittelbare (n) Austauschbarkeit) の形態にある。このように、商品 B があるがままの姿で直接的交換可能性の形態にあるということは、商品 B がそのあるがままの姿で社会的存在であると認められているということである。こうして、商品 B に対象化された私的労働は私的労働のままで社会的労働として認められていることになる。このように、まず、等価形態にある商品 B に表わされた私的労働がそのまま社会的労働として認められる。そしてその上で、つまりここでもまた〈回り道〉を経た上で、これと等置されている限りで、相対的価値形態にある商品 A に表わされた私的労働もまた社会的労働として認められることになる。人間語による認識と叙述はこのように線形な時間順序にしたがう以外にはない。だが、商品語の〈場〉で起きていることはこうした人間語の世界を超えて出ている。まさしく価値表現そのもののうちに、〈私的労働の社会化〉過程が含みこまれているの

であり、線形な時空を超えて、いわば一挙的に私的労働の社会化が実現されるのである。ただここ、すなわち「相対的価値の第一の、または単純な形態」における社会性は、未だ低いレベルの社会性でしかない。しかし、ここでも等価形態にある商品に対象化された私的労働である具体的労働が、そのまま社会的労働として認められているということは厳然として生じているのである。価値表現を問題にしない限りこのことはわからない。人間語による分析的抽象化を遂行していく世界ではあくまで価値表現を問題にはしていないので、この過程を捉えることはできなかったわけである。

ところで、〈自然的規定性の抽象化〉過程だけでなく、いま述べた〈私的労働の社会化〉過程をも踏まえた〈回り道〉の議論に関連して、久留間鮫造が指摘した『資本論』初版の誤訳問題も絡めて少し触れておく。等価形態にある商品が直接的交換可能性の形態にあるという点を掘り下げて確認しておく必要があるからである。価値関係〈商品 A = 商品 B〉について、「商品 A は自分に商品 B を等置する」と捉えるべきであるにもかかわらず、「商品 A は自分を商品 B に等置する」と宮川実、長谷部文雄が誤訳し、宇野弘蔵もまた彼の自著でそのように書いていることを久留間は指摘し、このように捉えるといわゆる回り道が理解できなくなると指摘した(註 68)を参照のこと)。この久留間の指摘はまったく正しく価値形態の理解の核心に触れている。自分を現実的に商品として示そうとする商品 A はあくまで自分自身ではその目的を果たすことができず、したがって相対的価値形態の位置に座し、何らかの異種の商品 B を自分に等置し、それを自分の等価物とする。かくして商品 B は相対的価値形態に対する等価形態になり、商品 A と直接に交換可能なものになる。この等置が価値関係である以上、つまり等置が価値におけるものである以上、この価値関係の内部では、商品 B をつくる具体的労働がそれ自体で価値形成労働に、そして商品 B に表わされた具体的労働そのものが価値実体たる抽象的人間労働の実現形態・現象形態となり、かくして、商品 B はそのあるがままの姿 = 現物形態のままで価値物となる(つまり、価値体として意義をもつ)。こうした迂回路を経た上で、商品 A は商品 B と等しいとされている限りにおいてそれもまた価値物、すなわち商品であることが示される。以上のことは既に述べてきたことであるが、この一連の事態は「商品 A は自分を商品 B に等置する」と捉えることから決して描き出すことができず、把握できず、かくして価値関係を理解することができない。なぜか。商品 A であれ商品 B であれ、その他どんな商品であれ、商品はそれ自体では決して商品としての属性すなわち価値という属性を表わすことができず、ただ価値関係に入ることを通じてのみ、価値関係に入った上でだけ、価値という属性をもったものとして現実的に現われ得るからである。いかなる商品も、自分をあらかじめ価値だとして価値関係に入るのではない。この点の理解は等価形態にある商品から見ると容易になる。何らかの商品に等置されることによって、つまり等価形態に置かれることによって、その商品は相手の商品と直接に交換されうるものという性格をもつのであり、それゆえそれは価値とみなされているのであり、それ自体で価値物としてあるわけである。等価物にされるや否や、その商品は相手との直接的交換可能性をもつものとなり、価値であることが示されているわけである。だからこそ、自らを現実的に商品として実現しようとする商品は、何らかの異種の商品を自分に等置し、この等置によってその異種の商品をまず直接的・非媒介的交換可能性の形態にし、つまり価値物とし、その上でそれと等しい限りで自分もまた価値であること、その異種の商品と交換可能であることを間接的・媒介的に示すということになるのであり、それ以外にないのである。これと逆に、商品 A が自分を商品 B に等置する、ということは、既に自分が相手との直接的な交換可能性をもつものであること、価値であることを前提とすることであり、それを前提として商品 B を価値物にすることになってしまうのであ

る。もしそれが可能なら、労働生産物は商品形態をとる必要がないということになる。直接的な生産物同士の交換、あくまで一定の価値規定を必要とするではあろうが、商品交換ではない直接的な労働生産物の交換が実現されることになる。これに対して商品交換では、あくまで等置される方が、等置されるというその受動性によって、相手との直接的・非媒介的な交換可能性をもつ、ということの理解がポイントなのである。

ここで、一言注意しておきたい。この直接的交換可能性に関して、相対的価値形態にある商品（ここでは商品 A）が等価形態にある商品（ここでは商品 B）に直接的交換可能性を与える、という表現をしている論者がいるが、これは間違った言い方である。商品 A が商品 B に直接的交換可能性を与えるのではなく、等置関係ができるや否や、商品 B は直接的交換可能性をもつ、すなわち、直接的交換可能性の形態にあるのであって、直接的な交換可能性は、決して与えたり与えられたりするものではないのである。与えるのであればあらかじめそれをもっていなければならないであろう。商品 A は決して直接的・非媒介的な交換可能性をもっていない。商品 B と等しいとされるかぎりでは間接的・媒介的に交換可能性をもつのである。この等置における双方の意義の相違を理解することはきわめて重要である。等価物が等価物である限りでもつこの直接的・非媒介的交換可能性という特質によって、完成された価値形態、すなわち貨幣形態においては、貨幣以外のすべての商品は貨幣との等置によってはじめて、間接的・媒介的に交換可能性をもつのであり、貨幣は貨幣であることによってつねに直接的交換可能性をもつことになるのである。ここに貨幣の秘密があり神秘性がある。だからいま述べたことは単なる表現上の差異の問題に解消できないものなのである。直接的交換可能性について、それを与えたり、与えられたりするものと考える典型例が岩井克人である。彼はそのことによって、彼独自の「貨幣形態 Z」なる荒唐無稽のものを案出したのである⁸²⁾。岩井は、マルクスが示した直接的・非媒介的な交換可能性の形態とそうではない形態、すなわち間接的・媒介的な交換可能性の形態との区別をまったく無視し、前者だけで考えているのである。「直接的」という概念規定を岩井はどのように捉えたのだろうか。岩井がどのように考えたのかは別として、マルクスは次のようにはっきり述べている。これは初版本文の形態Ⅲのところであり、先取りになるが引いておく。

〔一般的価値形態における一般的等価形態にある〕ある一つの商品がすべての他の商品との直接的な交換可能性の形態をとっており、したがってまた直接的に社会的な形態をとっているのは、ただ、すべての他の商品がそのような形態をとっていないからであり、またそのかぎりにおいてのみのことなのである。言い換えれば、商品一般が、その直接的な形態はその使用価値の形態であって、その価値の形態ではないために、もともと、直接に交換されうる、すなわち社会的な、形態をとっていないからなのである。⁸³⁾

かくして一般的等価物に表わされた私的諸労働が直接に社会的労働として認められることになり、一般的等価物でない、その他すべての商品に表わされた私的諸労働は一般的等価物との等置によって間接的・媒介的に社会的労働として認められることになるのである。

商品は、生来、一般的な交換可能性の直接的な形態を排除しているのであって、したがってまた一般的な等価形態をただ対立的にのみ発展させることができるのであるが、これと同じこと

は諸商品のなかに含まれている諸私的労働にも当てはまるのである。これらの私的労働は直接的には社会的ではない労働なのだから、第一に、社会的な形態は、現実の有用な諸労働の諸現象形態とは違った、それらには無縁な、抽象的な形態であり、また第二に、すべての種類の私的労働はその社会的な性格をただ対立的にのみ、すなわち、それらがすべて一つの除外的な種類の私的労働に、ここではリンネル織りに、等置されることによって、得るのである。これによってこの除外的な労働は抽象的な人間労働の直接的で一般的な現象形態となり、したがって直接的に社会的な形態における労働となるのである。したがってまた、その労働は、やはり直接的に、社会的に認められて一般的に交換されうる生産物となって現われもするのである⁸⁴⁾。

(vi) 価値の実体と等価形態の謎性

以上二重の社会化の過程、すなわち、〈自然的規定性の抽象化〉過程と〈私的労働の社会化〉過程を経て商品 A は現実的に商品になる、と同時に、等価形態にある商品 B は貨幣の原 - 形態になる。この等価形態については更に次のことを述べておかななくてはならない。

商品 B がとっている形態である等価形態においては、具体的な形態、そのあるがままの姿態が、抽象的なものの実現形態・現象形態に、また私的なものがそのまま社会的なものを表現する。このことはただ商品の価値関係の内部でだけそうなのであるが、しかし、商品 B にあっては、具体的なもの・私的なものそのものが、そのままの姿態で抽象的なもの・社会的なものを表現するので、商品 B がそのあるがままの姿で、そもそも初めから、価値関係に入る前から、抽象性・社会性を内的属性として持っているかのように人々の眼に映る。このような不可解さ、等価形態に生じる謎的性格が、貨幣の持つ神秘的性格の基礎にあるのである⁸⁵⁾。

等価形態にある商品 B (上着) に生じていることは、商品 A が自らが価値であること、すなわち商品であることを示すために、自分に商品 B を等置したことから生じたことである。商品 A が自分の価値を表現するために商品 B を自分に等置したのである。だから、この価値関係においては商品 A が主導的に振る舞い、商品 B はあくまで受動的である。つまり、商品 A (リンネル) が自らの価値を表現すべく、つまり自らを現実の商品として示すために主導的に振る舞っているのだ。

上着は受動的にふるまっている。それはけっしてイニシアチブを取ってはいない。上着が関係のなかにあるのは、それが関係させられるからである。⁸⁶⁾

この〈主導—受動〉関係は商品語をしゃべるのが相対的価値形態にあるリンネルであるという点にも現われる。リンネルが一方的にしゃべるのだ。商品語について〈はじめに〉に引用したもの、その註 1) の中に引用したもの、そして (iii) の冒頭に引いた「リンネルは、ひとたきでいくつもの蠅を打つ」というマルクスの註釈にそのことが示されている。では、「関係させられ」ただけの商品 B (上着) は、黙っているだけなのだろうか、頷くぐらいはしているのだろうか。もちろん、人間語の世界のことをあまり当てはめても仕方がない。ただ、等価形態にある商品のこの寡黙さがクセモノなのだ。価値関係の中での商品 B の被規定性は、主導的な商品 A (リンネル) の反射規定である。にもかかわらず、それが人々の眼には逆に見える。

上着の等価物存在は、いわば、ただリンネルの反射規定なのである。ところが、それがまった

く逆に見えるのである。一方では、上着は自分自身では、関係する労をとってはいない。他方では、リンネルが上着に関係するのは、上着をなにかあるものにするためではなくて、上着はリンネルがなくてもなにかあるものであるからなのである。それだから、上着にたいするリンネルの関係の完成した所産、上着の等価形態、すなわち直接に交換されうる使用価値としての上着の被規定性は、たとえば保温するという上着の属性などとまったく同じように、リンネルにたいする関係の外にあって上着には物的に属しているように見えるのである。⁸⁷⁾

社会的であることの、等価形態に生じたこの不可解さ・謎的性質は、相対的価値形態にある商品に現われる社会性との比較から、よりはっきりする。今度は第二版から引く。

ある一つの商品、たとえばリンネルの相対的価値形態は、リンネルの価値存在を、リンネルの身体やその諸属性とはまったく違ったものとして、たとえば上着に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、それが社会的関係を包蔵していることを暗示している。等価形態については逆である。等価形態は、ある商品体、たとえば上着が、このあるがままの姿の物が、価値を表現しており、したがって生まれながらに価値形態をもっているということ、まさにこのことによって成り立っている。いかにも、このことは、ただリンネル商品が等価物としての上着商品に関係している価値関係のなかで認められているだけである。しかし、ある物の諸属性は、その物の他の諸物にたいする関係から生ずるのではなく、むしろこのような関係のなかではただ実証されるだけなのだから、上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だつとかいう属性と同様に、生まれながらにもっているように見える。それだからこそ、等価形態の不可解さが感ぜられるのであるが、この不可解さは、この形態が完成されて貨幣となって経済学者の前に現われるとき、はじめて彼のブルジョア的に粗雑な目を驚かせるのである。⁸⁸⁾

社会的であるということは、何よりも第一に自然的であるということに対する概念であるのだから、それは人々の社会的関係において現われるのであり、決して自然的属性、すなわち自然物の一属性のようにあるわけではない。商品 A (リンネル) の相対的価値形態は、商品 A の価値存在を、商品 A の体・使用価値・現物形態とは異なる商品 B (上着) と等しいというその関係において表わすので、そこに社会性が示されている。ところが等価形態ではこれとはまったく別のことが生じている。商品 B ではその現物形態そのものが価値を表現し、この限りで価値は商品 B という姿をもって現われているので、商品 B が自然形態のままで内的属性として価値という属性をもつかのように人々の眼には映るのである。社会的であることがあたかも自然的属性のように、自然物の内にある属性のように現われるのだ。ある自然物の自然的属性の場合は、例えば、その質量、体積、熱容量等のように、それと他の自然物との関係において顕現し表現されるので (ある何かを基準・単位・ものさしとして)、このことと同じように価値という純粋に社会的なものさえも、等価形態にある商品 B の生まれながらにもつ自然的な性質であるかのように人々の眼に映るわけである。こうして商品という社会的な物、社会関係を体現した物象 (Sache) は人々の眼には社会性が自然的属性のように捉えられて単なる物 (Ding) に見える。商品として現われてはいない単なる労働生産物はあくまで物 (Ding) である。これが商品になると人々の社会関係を含みこみ・背負った物象 (Sache) になる。だが人々

の眼にはこの社会関係がそれとしては捉えられず、社会性をも自然的属性のように捉えられて商品という物象 (Sache) は自然物・物 (Ding) に見えるわけである。これを最初の〈物〉と区別するために〈もの〉と書くことにする。ついでに言う、商品は〈商品 - 貨幣 - 資本〉というトリアーデを成し、これらのものは諸物象 (Sachen) である。だが、先に引用したが、商品は次のように商品語で語るなのであった。

もし諸商品がものを言うことができるとすれば、彼らはこう言うであろう。われわれの使用価値は人間の関心をひくかもしれない。使用価値は物 [Dingen] としてのわれわれにそなわっているものではない。だが、物としての [dinglich] われわれにそなわっているものは、われわれの価値である。われわれ自身の商品物としての交わりがそのことを証明している。われわれはただ交換価値として互いに関係し合うだけだ、と。⁸⁹⁾

商品は自分の〈体〉を〈忘れてしまう〉、ということであった。この行き着く究極の在り様が、商品化した資本、すなわち利子生み資本形態をとる資本、種々の架空資本等である。これらの形態では物としての使用価値はまったく存在しない。自分の〈体〉を〈忘れてしまう〉どころではなく、そもそも自分の〈体〉が存在しない。こうしてこれらのものは究極的に抽象的な〈もの〉をさえ通り越してしまう。まったく〈体〉を欠落させた架空のもの、ただ〈未来〉に抽象的な〈もの〉に転化することを当て込んだ架空の運動でしかない。こうしたところにまで突き進む端緒が、単純な価値形態においてもその等価形態にはっきりと現われ出ているわけである。

ここで、価値実体が文字通り実体としてどのように現実的な形で現われ出てくるのかを確認しておきたい。商品 B (上着) は、商品 A (リンネル) に等置されることによって、商品 B に表わされた労働が商品 A に表わされた労働に等置されることとなり、この等置によって商品 B を作る労働が単なる人間労働に還元され、商品 B に表わされた個別的な・具体的有用な労働が、そのままの形で、自然的規定性を抽象化された・人間労働の実現形態になり、また、あくまで相互に独立して営まれた私的労働の凝固であるそれが、そのままの形で、直接的交換可能性という社会性を表わす労働になる。こうして商品 B に対象化された私的で具体的労働は、現実的に価値の実体と言うしかないものとなる。商品 B の使用価値・現物形態そのものが価値物として現われ、商品 B に凝固した私的で具体的な労働そのものが、純粹に抽象的で社会的なこの価値を量化するものとして、実体なるもの、しかも社会的な実体なるものを表わすことになるのである。人々の社会関係が、日々、膨大な価値関係においてこのことを現出させているのであり、現出させざるを得ないのである。価値関係のなかで、商品 B に対象化された私的で具体的な労働がはじめて、現実的に価値実体を表わすことになるのである。単純な価値形態においては、そのことは未だはっきりと固定してはいないが、しかし、社会的実体としてはっきりとこの現実世界に現われ出ているのである。

(vii) 初版本文価値形態論の形態 II に関して

単純な価値形態においては、相対的価値形態にある商品 (この例ではリンネル) は未だただ一つの商品 (この例では上着) と価値関係にあるだけであり、商品リンネルの価値はただ一つの商品上着で表わされているだけである。それはきわめて不安定な状態にある。出発は商品リンネルが自分の価値を表現しようとするところにあった。リンネルの価値がより客観的に、より社会的なもの

して表わされる形態として、形態Ⅱ、すなわち、展開された価値形態がある。

20 エレのリンネル = 1 着の上着 または = u 量のコーヒー または = v 量の茶 または = x 量の鉄
または = y 量の小麦 または = 等々。

第二の形態においては、〔…〕リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄などで示されていても、つまりまったく違った所有者たちの手にある無数に違った商品で示されていても、つねに同じ大きさのままである。〔…〕交換が商品の価値の大きさを規定するのではなくて、逆に商品の価値の大きさが商品のいろいろな交換の割合を規定するのだ、ということが明白になるのである。／〔…〕第一の形態はリンネルのなかに含まれている労働をただ裁縫労働にたいしてのみ直接に等置している。第二の形態はこれとは違っている。リンネルは、その相対的な諸価値表現の無限な、いくらでも延長されうる列において、リンネル自身のなかに含まれている労働の単なる諸現象形態としてのありとあらゆる商品体に関係している。それだから、ここではリンネルの価値がはじめて真に価値として、すなわち人間労働一般の結晶として、示されているのである。⁹⁰⁾

リンネルに表わされた具体的労働はいまやきわめて多種多様な具体的労働を現象形態とする抽象的人間労働と等しいものと認められ、かくしてそれは文字通り人間労働一般として認められ、リンネル価値はその人間労働一般の凝固体として価値として十全に認められていることになる。しかもリンネルは他の種々様々の労働生産物たる商品と、間接的・媒介的であるとはいえ交換可能であるという社会性をもっており、リンネルに表わされた私的労働は他の種々様々の労働との同等性 = 交換可能性という社会性をもつものとなっている。社会性の水準が飛躍した。

ところで、形態Ⅰでは相対的価値形態にあるリンネルだけが商品語でしゃべっていた。等価形態にある上着は沈黙していた。そのことからすれば、この第二の価値形態では、喋っているのはただ一つの商品リンネルだけであり、他のすべての商品たちは沈黙している。唯独り饒舌な商品リンネルと、ひたすら沈黙している他のすべての商品たち。これはなかなか異様な光景である。だが黙していることが直接的社会性を体現し一般性を表わしていた。相異なる、膨大な数の個々の商品に体現された直接的な社会性と一般性、それらに対する唯一つの間接的でしかない社会性、という対立構図は少なくとも人間語の世界では矛盾と言って良いであろう。この形態の不安定性は明らかである。社会性の水準が今一段高められなければならない。

(viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して

「相対的な価値の第三の、転倒された、または逆の関係にされた第二の形態」 = 一般的価値形態に移ろう。次のようなものである。

1 着の上着	= 20 エレのリンネル
u 量のコーヒー	= 20 エレのリンネル
v 量の茶	= 20 エレのリンネル
x 量の鉄	= 20 エレのリンネル
y 量の小麦	= 20 エレのリンネル

: :
 : :
 : :

ここでは直接的な交換可能性の形態である等価形態には、ただ一つの商品リンネルが座っている。リンネルだけが等価形態になり、その他の商品はすべて等価形態から排除されている。ただ一つリンネルだけが直接的交換可能性の形態・直接に社会的な形態にあり、等価形態にある商品の特殊な被規定性から、商品リンネルの使用価値・現物形態それ自体が直接に社会的なもの、すなわち価値の実現形態・現象形態に、また商品リンネルに対象化された具体的有用労働がそのまま抽象的人間労働の実現形態・現象形態になり、その特殊な私的労働が直接に一般的社会的労働になる。この形態にあるのはただ商品リンネルだけなのだから、これが一般的な等価物、一般的価値肉体、抽象的人間労働の一般的な物質化となる。商品リンネルに対象化された特殊な具体的有用労働が、人間労働の一般的な実現形態として、一般的労働、すなわち価値実体そのものになる。こうして商品リンネルでない他のすべての商品は、等価形態から排除され、それゆえに、直接的交換可能性の形態・直接に社会的形態を持たない商品、つまり商品リンネルとの交換関係に入るという媒介を通じてだけ交換可能性・社会性を得る商品となる。そしてまた商品リンネルと異なるあらゆる商品に対象化された労働は、商品リンネルに対象化された労働との等置によってのみ、人間労働として認められるのであり、それらの商品は価値として、すなわち商品として認められるのである。純粹に社会的なものたる価値は商品リンネルとして現われ、価値の量化を実現する価値実体は商品リンネルに対象化された特殊な・私的な具体的労働として現われる。この異様な形態、形態Ⅲにおける等価形態(=一般的等価形態)に関してマルクスはきわめて印象的な特徴付けを行なった。

形態Ⅲにおいては、リンネルはすべての他の商品にとっての等価物の類形態として現われる。それは、ちょうど、群れをなして動物界のいろいろな類、種、亜種、科、等々を形成している獅子や虎や兎やその他のすべての現実の動物たちと相並んで、かつそれらのほかに、まだなお動物というもの、すなわち動物界全体の個体的化身が存在しているようなものである。このような、同じ物のすべての現実存在する種をそれ自身のうちに包括している個体は、動物、神、等々のように、一つの一般的なものである。それゆえ、リンネルが、一つの他の商品が価値の現象形態としてのリンネルに関係したということによって、個別的な等価物となったのと同じように、それは、すべての商品に共通な、価値の現象形態としては、一般的な等価物、一般的な価値肉体、抽象的な人間労働の一般的な物質化となるのである。それだからリンネルにおいて物質化されている特殊な労働が、いまでは、人間労働の一般的な実現形態として、一般的な労働として、認められるのである。⁹¹⁾

形態Ⅰに既に現われ出ている奇妙な転倒について、先に初版付録から引用をしておいたが、ここでその転倒はまったきものとなる。商品に表わされている抽象的人間労働を価値の実体というこれまでの長い哲学史上の用語を用いて概念規定したことの意義がここにはっきりと示されており、まさしく価値とその実体への根源的な批判として概念が措定・定立されたことが示されている⁹²⁾。

マルクスがこのように、長い哲学史上の概念規定をめぐる議論を踏まえ、〈価値－価値実体－商品〉

への批判を遂行するためにこそ、〈実体－社会的実体〉という用語によって価値実体概念を措定したことに対してまったくの無自覚・無理解に陥っているのが、一方では社会的実体である価値実体を自然実体のように捉えてしまうスターリン主義派の人々であり、他方が実体というものに拒否感を抱え、価値実体を否定・拒否して価値を単なる関係概念に回収しようとする人々である⁹³⁾。商品に表わされた抽象的労働を実体、社会的実体として人々が日々無意識裡に定立しつづけていること、その社会的実体を価値の実体としその凝固物として価値（商品価値）があること、かかる価値の頹落状況に人々が物神崇拜によって安らっていること、つまり人々が社会的実体の目に見える化身である貨幣の〈力〉に宗教的に隷属していること、——こうした事態に対する根源的批判を遂行するためにこそ〈実体〉という哲学用語をマルクスが用いたことが理解されていないのである。だから双方の人々のいずれも、他でもなく労働価値説への批判として、商品に表わされた労働、抽象的労働とその凝固、価値の実体と価値等々が措定されていることを把握できないのである。『資本論』を取り上げる論者はほぼ必ずと言って良いほど、サブ・タイトルが「経済学批判」であることに触れるが、その意義を精確に把握している論者は皆無である。

ともあれこのようにして、一般的等価物たる商品リンネルは、形態Ⅱにおける饒舌を含み込んだ沈黙せるものになる。沈黙というものはいかに恐ろしいものであることか。

ただし、一般的等価形態がリンネルに未だ固定化したわけではない。だから次の形態Ⅳでマルクスはリンネルのみならずあらゆる商品が一般的等価形態を取り得ることを示すことになる。そこへの橋渡しとしてマルクスは言う。

一商品の等価形態が、他の諸商品の諸関係の反射であるのではなくて、その商品自身の物的な性質から生ずるかのような外観は、個別的な等価物の一般的な等価物への発展につれて固まってくる。[...] /とはいえ、われわれの現在の立場においては一般的な等価物はまだけっして骨化されてはいない。⁹⁴⁾

(ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して

初版本文価値形態論の形態Ⅳはそれまでの形態Ⅰから形態Ⅲまでのものとは位相が異なる。形態Ⅲおよび形態Ⅱに一例としてとられたリンネルの位置に任意の商品が座り得るということを示すものが形態Ⅳである。もともと例として取られたリンネルは単なる一例であり代表であり任意の一つである。それゆえ形態Ⅱの相対的価値形態の位置に、そして形態Ⅲの等価形態の位置に任意の（あらゆる）商品が位置し得ることは明らかである。

マルクスは、価値形態Ⅲ（一般的価値形態）に関する部分の最終パラグラフで、「リンネルに当てはまることは、どの商品にも当てはまる」⁹⁵⁾ と言い、それを踏まえて、形態Ⅳの最終パラグラフで次のように総括する。

要するに、商品の分析が明らかにするものは、価値形態のすべての本質的な規定、およびその対立的な諸契機における価値形態そのもの、一般的な相対的な価値形態、一般的な等価形態であり、最後に、単純な相対的な諸価値表現のけっして終結することのない列であって、この列は、最初は価値形態の発展における一つの過渡段階をなすのであるが、結局は一般的な等価物の独自に相対的な価値形態に一変するのである。しかし、商品の分析が明らかにしたところで

は、これらの形態は商品形態一般なのであり、したがってどの商品のものにもなるのであるが、ただ対立的にのみそうなるのであって、もし商品 A が一方の形態規定にあるならば、商品 B、C、等々はこれに対立して他方の形態をとる、というようになるのである。⁹⁶⁾

こうして真の意味で「すべての商品の貨幣存在」が示されたことになり、貨幣の秘密は完全に暴露された。

註

68) ここでは初本文を主テキストとすべき点に関する註記と共に、この論点と密接に絡む、価値形態論についての議論・論争の歴史的な一定の総括も行なっておきたい。この総括は本稿著者のひとりである崎山による『思考のフロンティア 資本』（岩波書店、2004年）での価値形態論読解の不十分性を補うものでもある。前掲『マルクスの物象化論』で佐々木は、「『商品語』の比喩は、『資本論』第1巻第2版において初めて登場する」(p.152)、「商品語の論理は、『資本論』第1巻第2版においてはじめて確立されたものである」(p.182)とし、まさしく商品語を問題とすることによって、初版ではなく第二版を主テキストとすべきだと判断している。だがこれは、読み間違えによる誤った判断である。本稿の〈はじめに〉に引用した初版付録の一文は、人間である「私」＝マルクスの下す判断と「リンネルそのものが〔…〕語っている」こととがきわめて鮮明に対比されていた。商品語という言葉そのものは使われてはいないが、商品語を問題にしていることは明らかである。また初本文価値形態論も、普通の人間の言葉、その論理の世界では処しきれない世界のことを扱っているという点がはっきりと示されている。「リンネルは、ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」というのだから。商品語そのものはわれわれには感覚的に捉えられない。取り敢えず商品語の〈場〉というものを措く以外にないのである。この点では初本文の方が第二版よりも商品語の〈場〉の特質が強く現われているのであり、だから前者の方に弁証法がより鋭く現われ出ていると言い得るのである。また佐々木は第二版で商品語の概念が確立されたと捉えることによって、第二版において相対的価値形態にあるリンネルが過程の主体であって商品所有者が過程の主体ではないことがより明確になったと言う (pp.181-187)。だが、これも外的を外した議論である。初本文が相対的価値形態の方から見ているという点で第二版より商品語の〈場〉にそくしたものになっており、過程の主体が相対的価値形態にあるリンネルであることがより明確に語られているのである。佐々木の判断とは逆に、テキストとしては初本文の方が第二版よりも論理的に優位にあるのである。このように佐々木は、商品語の重要性を強調しながらも結局はそれを比喩としてしか捉えるところから自由ではなかったがゆえに、初本文価値形態論と第二版のそれとを詳細に比較検討したにもかかわらず誤った判断に至ったわけである。だがそもそも、初本文、初版付録、第二版の各価値形態論、更には、エンゲルスの手による第三版、第四版の各価値形態論を厳密に比較検討すること自体、従来ほぼまったくと言って良い程なされてはこなかったものであり、宇野弘蔵が価値形態論の重要性を主張し、しかし誤ったその理解に陥っていたところから生じたいわゆる〈宇野－久留間〉論争が行なわれた日本においてさえそうなのである。当論争における久留間鯨造の圧倒的優位にもかかわらず、テキスト批判を一切行なわず価値形態論の意義をまったく掴みそこなった宇野の主張の方がむしろ受け入れられてきた理論水準の低さがあったのである。この点では日本でさえこうなのだから、日本以外では価値形態論に関する研究はほぼまったくと言って良いほどなされてはいない。前掲のD. ローゼンベルクなどのスターリン主義派の価値形態論は単なる歴史的発展記述に墮しており、他方の異端派、例えばI・I・ルービンは価値形態論自体を完全に無視しているという状態である。こうした経緯からすれば、前掲モイシェ・ポストン『時間・労働・支配』が「マルクスの経済学批判の核心にあるカテゴリーの根本的な再解釈」(邦訳版、p.7)を目指すとしながらも、価値形態論を完全に無視しているのは何も例外ではないのである。またデイヴィッド・ハーヴェイは、前掲『〈資本論〉入門』において、当然にも各テキスト批判をまったく行なわず、もっぱら現行版(第四版＝エンゲルス版)に拠って議論しているのだが、価値形態論についてどう理解しているのかと言えば、「私見では、この節には退屈な材料がたくさん含まれており、議論の重要性があまりに容易に覆い隠されてしまう」(Harvey, David, *A Companion to Marx's Capital*, London and New York, Verso, 2010, p.30.: 邦訳版、p.59)などと、価値

形態論の重要性を把握しているならば決してあり得ないであろう発言をしてしまう体たらくである。そして案の定、誤読につぐ誤読を重ねる。例えば「彼〔マルクス〕は〔…〕まずは単純な物々交換の状況から出発する」(ibid.: 邦訳版、p.60)などと、価値形態の形態 I (単純な価値形態) を物々交換だと理解する始末なのである！これは余りにも初歩的な誤読である(本稿〈I〉の(iv)、連載第一回下段番号 p.98、および註 31)を参照のこと)。価値形態論に対するこうした無理解から有意義な〈学び〉を期待することなどまったくの論外である。さて、次いで少し時間を遡って、ルイ・アルチュセールの議論を取り上げてみよう。彼は言う。「たしかに、われわれは皆『資本論』を読んできたし、いまも読んでいる。〔…中略…〕われわれはたえず、毎日、誠実に『資本論』を読んできた。〔…中略…〕／けれども、いつかはきっと、『資本論』を文字通りに読まなくてはならない。テキストそのものを、四巻全体を、一行一行読むこと、〔…中略…〕いやそれどころか、『資本論』をフランス語版で読むのですませるのではなくて〔…中略…〕、少なくとも基本的な理論的諸章や、マルクスの鍵概念があふれているすべての文章は、ドイツ語版のテキストで読まなければならない」(Althusser, L., et al., *Lire le Capital*, tome 1, Paris, Maspero, 1965, p. 4.: L. アルチュセール／J. ランシエール／ピエール・マシュレー／E. バリバル／R. エスタブレ、今村仁司訳『資本論を読む(上)』ちくま学芸文庫、1996年、pp.17-19。引用文中の／は改行箇所、以下同様。なお、アルチュセールが『資本論』について全四巻と言っているのは、いわゆる『剰余価値学説史』も含めてのことである)、と。アルチュセールはこのように述べているが、当時入手可能であった MEW をはじめとしたドイツ語版テキストを厳密に「一行一行」読むことは結局なかったようである。彼は『資本論を読む』で、冒頭の商品論および貨幣論を素通りして、古典派経済学の「労働の価値」概念に対する批判としてのマルクスの〈労働力の価値〉の概念を取り上げるのであるが、そこから必要とされる価値の概念そのもの、その実体と形態、つまり商品そのものの概念に立ち戻って議論することをしない。価値が問われない以上価値形態は問われず、かくして商品は問われることはない。彼が高唱する〈構造〉概念は、『資本論』のもっとも重要で根本的・基礎概念である商品の概念をまったく対象とし得ない、否、そもそも対象として措定すべきであるという問題意識すら生まないものでしかない。彼の〈構造〉は少なくとも資本主義批判のための概念ではなく、資本主義の現状を追認する単なる〈ことば〉にすぎない。

ここで再び日本における議論・論争に立ち戻ることにする。〈久留間-宇野〉論争、とりわけそこにおける久留間鮫造の議論について簡単に触れておきたい。まさしくこの論争とそこにおける久留間の議論によって、価値形態論に関する『資本論』解釈の地平は一挙に飛躍したからである。では、〈宇野-久留間〉論争の中心テーマは何であったか。価値形態論は、商品所有者とその欲望を不可欠とするかどうか、これであった。宇野はそれを不可欠とし、久留間は不要とした。この論点について言えば、完全に久留間が正しい。宇野はまったく不要な疑問を『資本論』に対して抱き、不必要に立論し無駄な議論を展開しているのであって、この点に関する彼の議論全体は、無意味・無価値である。その議論はただもっぱら宇野派の中でだけ通用するものであり、『資本論』を前にして宇野、久留間両者の議論を読み比べれば、直ちに久留間の優位が解かる体のものである。だからこの論点については、論争に関する主文献を挙げるにとどめる(向坂逸郎／宇野弘蔵編『資本論研究』上、河出書房、1948年、久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年、同『貨幣論——貨幣の成立とその第一の機能(価値の尺度)——』大月書店、1979年、宇野弘蔵『価値論』河出書房、1947年、同編『資本論研究 I 商品・貨幣・資本』筑摩書房、1967年)。ここではこの主テーマに関連して生じた論点、しかし、価値形態論にとってはこちらの方が決定的に重要であり価値形態理解の核心に触れるものを取り上げておきたい。次の問題である。労働生産物 A が現実的に商品になるために異種の商品 B との間に形成される等置関係=価値関係、すなわち、商品 A = 商品 B について、久留間が、A が自分に B を等置する、と捉えたのに対して、宇野は、A が自分に B を等置すると言おうと、A が自分を B に等置すると言おうとどちらでもかまわない、とした対立点である。この論点はいわゆる回り道の理解とも直結した価値形態論の核心をなすものである。ここでも久留間がまったく正しく、宇野が価値形態を全然理解していないことがあらわになった。久留間の以下の基本的に正しい主張を参照せよ。「ここでわれわれが何よりもまず注意しなければならないことは、20 エルレのリンネル = 1 枚の上衣 あるいは、20 エルレのリンネルは一枚の上衣に値する、という価値方程式において、リンネルはいきなり自分を上衣に等置することによって価値形態を得ているのではなくて、まずもって上衣を自分に等置することによって上衣に価値物としての、すなわち抽象的人間的労働の直接的な体化物として

の、形態規定性をあたえ、そうした上ではじめて、この価値物としての定在における上衣の自然形態で、自分の価値を表現しているのだということである。こういう廻り道をしないでは、商品は価値形態をもつことができないのである。リンネルは、いきなり自分を上衣に等置することによって、すなわち自分は上衣に等しいのだと自称することによって、自分を価値物にすることはできない。それでは単なる独りよがりになってしまう。他面において、リンネルが上衣の自然形態でその価値を表わしうるためには、すなわち上衣の自然形態そのものを自らの価値の形態にしうるためには、あらかじめ上衣が価値物としての定在をあたえられていなければならぬ。言葉をかえていえば、上衣の自然形態がそのまま抽象的人間的労働の体化物を意味するものとされていなければならぬ。そしてそれは、リンネルが上衣を自らに等置することによって行われるのである。リンネルは、自分は上衣に等しいのだと自称することによって自分を価値物にすることはできないが、上衣は自分に等しいのだと宣言することによって上衣を価値物〔…〕にすることはできる。そこでリンネルは、かようにして上衣を価値物にした上で、自分は価値としては上衣と同じなのだ、ということによって、上衣の形態において、自分自身の価値性格を表現するのである。すなわち、その使用価値の形態であるところの自然形態から〔…〕区別された、価値形態をもつことになるのである」(前掲『価値形態論と交換過程論』pp.56-57)。ところでこの論点は『資本論』の翻訳問題とも絡んでいる。例えば、初版の次の文章：*Qualitativ setzt sie sich den Rock gleich, indem sie sich auf ihn bezieht als Vergegenständlichung gleichartiger menschlicher Arbeit,〔…〕*(MEGA, II/5, S.29)において、*sich*と*Rock*のいずれを3格としいずれを4格として訳出するののかという問題があり、長谷部文雄、宮川実の訳が3格と4格とをひっくり返して間違っして訳出していることを久留間は指摘する。そしてそれと共に、前掲宇野弘蔵『価値論』の文章で同様の間違っした表現があることをも指摘したのである(前掲宇野『価値論』pp.142-144、同『価値論』再版、青木書店、pp.136-137、前掲久留間『価値形態論と交換過程論』pp.60-62)。この指摘は宇野には相当堪えたに違いない。だがしかし、宇野は先述したように、この論点ではどちらでも良いとなおも居直ったのである。この居直りについては、宇野の回想録『資本論五十年』下(法政大学出版局、1973年、pp.713-716)に当学派外から見ればまことに滑稽で歪な師弟のやりとりが臆面もなく示されている。一方久留間は、宇野の居直りにたいしてまっとうな皮肉をあげせかけ、宇野たちが自讃する「学的」価値を暴いている(前掲久留間『貨幣論』、pp.107-114)。

以下、価値形態論の歴史的経緯と総括に関して必要な諸点を簡条書的に付加しておく。

- ① スターリン主義派のD. ローゼンベルグによるいわゆる正統派の見解は、第四版(現行版)に拠って価値形態の形態Ⅰから形態Ⅳの貨幣形態までを完全な歴史的発展過程として捉えるものであり、本来の価値形態論の課題、すなわち、労働生産物はどういうにして現実的に商品になるのか、そしてすべての商品はどのように貨幣性をもっているのかについてまったく触れもしない(前掲『資本論註解』第1巻参照)。またスターリン派に対する異端派I・I・ルービンはどうかと言うと、彼の主著である前掲『マルクス価値論概説』では価値形態についてまったく無視している。こうした価値形態論理解の水準の低さが今日までつづいているのである。
- ② 廣松渉は前述したように(本稿註2)を見よ)、宇野とは別の角度から、すなわち彼の認識論の根幹たる「四肢の構造論」を価値形態論に適用するというまったく場違いな・誤った目的から商品所有者を不可欠なもの、しかも単なる所有者ではなく過程の当事主体としてそれを価値形態論に導き入れている。そこには彼の哲学的思惟として現われた観念の肥大化が露骨である。商品語の〈場〉に人間語によって接近しなければならないという価値形態論の対象への配慮がまったく欠落している。つまり、人間語への無批判的妄信があり、商品語の〈場〉という対象にあまりにも無自覚である。
- ③ 価値関係・等置関係〈商品A = 商品B〉においては、Bの使用価値 = 現物形態そのものが価値の現象形態になるのであるが、このことはBの使用価値そのものの固有性はいつでも良いもの、何らかの使用価値 = 現物形態をもっていれば良いということが示されている。それゆえ、宇野が執拗に主張した価値関係における商品Aの所有者による商品Bへの特殊な欲望なるもの的重要性はまったく意味がないことが明白となる。商品Aにとって自分に等置される商品は、自分と異なるという条件のみが付された任意の商品で良いのであり、そこに商品Aの所有者の特殊な欲望などはまったく不要であり、久留間が主張したように捨象されるし、捨象されなければならないのである。
- ④ 久留間が指摘した3格と4格についての誤訳であるが、久留間の指摘以降もまったく訂正されていない

い。理由はまったく不明だが、その後の岡崎次郎訳（国民文庫、1976年）、江夏美千穂訳（幻燈社書店、1983年）、今村仁司訳（筑摩書房、2005年）もまた同じ誤訳を平然と継承している。なにゆえに敢えて誤りを犯すのか？ 各訳者は少なくともこの問題に関して明確な自己の見解を明らかにしなければならなかったはずである。

69) 初版付録は〈平易化〉というきわめてはっきりした目的があり、しかも本文を前提とするあくまで付録であるので、弁証法が損なわれ論理的な弱さや欠陥があったとしてもそれは納得し得るものであった。だがなぜマルクスは、第二版の価値形態論に貨幣形態を入れたのであろうか。この点についての詳細な検討は〈V〉の(ii)で行なう。

70) MEGA, II/5, S.28.

71) 『資本論』冒頭商品論の出だし（第二版以降では第1章第1節）の二商品の等置式ではもちろん、価値形態論（同第3節）における等置式もまた一定の条件、つまり、左辺にある商品が現実的に商品であることを示すための等置式という限定が付くが、任意の商品におけるものであることが意外と理解されていないようである。商品所有者がここでの議論に不可欠だと考えるのは、等置された商品の任意性について考えないことに大きな要因があろう。任意性についてきちんと踏まえていれば、等置された商品の使用価値の個々の特定の在り方・個性はなんら問題にならず、ともかく使用価値を持ってさえすれば良いことがわかるはずだからである。相対する商品所有者が自己の所有下にある商品の使用価値に関心をもち、相手の商品所有者が所有する商品の使用価値に関心を抱くといった、交換過程論での問題が価値形態Iにおいてもまったく論外であることは、等置される商品の任意性から明らかなのである。更に言えば、商品所有者を導入しようとする志向性は次のことによってもまた加速されている。すなわち、『資本論』の価値形態論を現行版にしたがって歴史的な貨幣生成論として理解し、価値形態Iを物々交換と重ね合わせて捉え、したがってそこでの商品交換が極めて狭く限定されたものであると誤解し、個別の使用価値の具体性に特別な意味を見出そうとすることによってである。商品所有者を価値形態論に不可欠と考える宇野弘蔵と宇野派の人々、および廣松渉については先に述べたが、ここではミシェル・アグリエッタ／アンドレ・オルレアン、井上泰夫／齊藤日出治訳『貨幣の暴力——金融危機のレギュレーション・アプローチ』（法政大学出版局、1991年）について少し述べておく。ただ彼らの議論は、『資本論』第二版で言えば第1章第1節の等置式と同じく第3節の等置式の区別も、更に価値形態論と交換過程論との区別もつけていない、はなはだ乱暴なものであり、『資本論』の価値形態論とはまったく無縁な、言うなれば、彼ら固有の交換過程論、すなわち貨幣生成過程論なのであるが、しかし彼らは「マルクスの価値形態論という人間精神の貴重な逸品」（p.35）などと『資本論』の価値形態論を高く評価し、価値形態論の形態IからⅢに沿った議論をしており、しかも、「マルクスは、交換そのものを理解するのに科学的に正当な唯一の視点に、すなわち交換者の視点に、身を置く」（p.33）などと言っているのだから、ひとこと苦言を呈さざるを得ない。彼らは言う。「本書の試論の目的は、貨幣を真正面から取り上げることであり、そうするためには、一八世紀の後半に経済学が構築されて以降、経済学的前提をなしてきたものを放棄しなければならない。価値の実体概念がそれである。価値の実体が効用であるか、それとも労働であるかは、貨幣の規定に関して何の変化も与えない」（p.8）と。ここで彼らは、価値実体概念を拒否すべきだと言っているのだが、しかし、それに関して効用概念を持ち出していることから解るように、古典派経済学の労働価値説も、マルクスの経済学批判—労働価値説批判も、近代経済学の効用学説—一般均衡論も、すべて一緒くたにして、これらが皆、価値論を基礎とするものとされて投げ捨てられているのである。これらの理論ではおしなべて「経済的事物に共通する質が当然のごとく自明のものとされ、社会の首尾一貫性があらかじめ前提されている」（p.8）のであり、これがけしからんというわけだ。彼らによれば、交換の場は、そもそも同一性を前提としない根本的に不均衡な場であり、商品所有者相互の欲望を介した根源的暴力の場であり、この根源的暴力の拡散と現実化を回避するためにそれを一点に集中する外的な社会制度、すなわち貨幣が要請され、第三項の排除という形でそれが実現される、というのである。ルネ・ジラルの理論を援用したこうした議論に現実性はまったくないが、問題なのは、彼らの言う欲望が価値論を否定した上でのものである以上、使用価値に対するものであり、したがって根源的暴力とされるものが使用価値をめぐるものである点である。彼らは「欲望 (desir; desire)」と言っているが、使用価値に対する、それをめぐるものでありかぎり、それはむしろ「欲求 (besoin; need)」であらう。商品生産の社会、資本主義的生産様式が支配する社会で

は使用価値ではなく価値、すなわち抽象化された普遍性でしかないが、その価値に表わされる普遍的な富、富一般に対するものこそが欲求と区別されるかぎりでの欲望ではないのか。彼らの考える社会の社会性の水準が、マルクスが『資本論』で押さえた社会性よりはるかに低いことがわかる。だがそもそも欲望は価値形態論では問題にならない。価値形態論に商品所有者は不要であり捨象されているからである。彼らが言うのとは逆に、「交換者の視点に、身を置く」ことなく、徹底して商品を主体として冒頭の商品論を展開したがゆえに、マルクスは偉大な成果をあげたのである。彼らの価値形態論－『資本論』理解はあまりにも低い水準にあり、価値形態論を問題にする以上は、せめて、宇野－久留間論争における久留間鮫造の議論ぐらゐは踏まえてほしいものである。ところで、ルネ・ジラルの理論を同じく参照して、第三項排除論を振り回したのが今村仁司である（『暴力のオントロジー』勁草書房、1982年；『排除の構造』青土社、1989年）。彼の場合、表面上は価値論を拒否していないので、その点がアグリエッタ／オルレアンとは違っているが、しかし議論の内容は、商品所有者を導入してマルクスの価値形態論をなぞる等、ほぼ同一である。しかも今村の立場は、価値論を否定していないとはいえ、価値実体を拒否するのである。そして彼の〈価値＝関係〉説を、マルクス的に聞こえる「非対象化的労働」なる用語で粉飾する。だが、この巨大な専門用語のダム湖のなかには、根源的な価値批判は一滴たりとも見られない。ここで、今村の「非対象化的労働」について一言しておきたい。いわゆる『経済学批判要綱』でマルクスは、生きた労働に対して根源的な概念規定を、非対象化労働（Nicht-vergegenständlichte Arbeit）という用語を用いて、「否定的に把握されたそれ」と「肯定的に把握されたそれ」という二重性において行なった（MEGA, II/1-1, S.216、前掲『マルクス 資本論草稿集1』大月書店、1981年、pp.353-354）。このマルクスの生きた労働に対する概念は議論が必要ではあるが、魅力的である。それを今村は用語だけ横取りし、無概念的無規定的で、ただロマン主義的雰囲気漂わせたものとして用いている（前掲『排除の構造』ちくま学芸文庫版、1992年 pp.143-151）。例えば今村は次のように言う。排除された第三項たる貨幣が資本形式という第四項に展開・発展するためには「地下的労働」なるものが必要だとし、かかる「地下的労働」は「具体的な生産的・対象化的労働ではなくて、私のいわゆる非対象化的労働」（p.144、傍点は引用者）だと言う。そして言う、「非対象化的労働が地下的という形容をうけとるゆえんは、それが経済形式の下方に排除されるばかりでなく、具体的生産的労働の蔭にすらくさされているからである」（同上）。錯視による排除の湿った「蔭」に重ね書きされる、地下の人間活動！ そしてこの究極の排除対象が「地下的」に存在しているという「真理」の発見者たる今村は、次のように、ロマンを吐露する。曰く。「非対象化的な地下的労働は、過剰の労働、余剰労働に他ならない。それははちきれんばかりの充溢せる身体であり、充溢し爆発をまつピュシスである。それは、突破可能な地表面があればいつでも、地上へと噴出する可能性をもつ潜勢力である。それが弱い地表をぶち破り地表に流れ出る暁には、地表面は流れ出る灼熱のマグマでおおわれ、すべての存在者はこの灼熱のマグマ流にひたされ溶解されるであろう。それはひとつのカオス的な状態となるだろう」（同上）、「全般化したスケープゴートとしての、全般化した第三項としての資本の存在性格は、非対象化労働をもってはじめて可能となる」（p.148）。こうした説話を今村は自らの「価値論」ととらえていたのだろうが、いかなる意味でも“論”と呼び得ないものである。それは煽情のラディカリズムの衣をまとった、貧弱な説話でしかありえない。

72) MEGA, II/5, S.29.

73) ibid., S.29.

74) ibid., S.32.

75) MEGA, II/6, S.83-84.

76) ibid., S.82.

77) MEGA, II/5, S.30.

78) ibid., S.30.

79) ibid., S.30.

80) ibid., S.31-32.

81) ibid., S.634.

82) 例えば岩井は次のように言っている。「[等価形態にある]上着が[相対的価値形態にある]リンネルと直接に交換可能なのは、リンネルがじぶんと直接的な交換可能性を上着にあたえているという社会的関

係の結果にすぎない。」(『貨幣論』ちくま学芸文庫、1998年、p.044)。このように岩井は直接的交換可能性なるものを与えたり・与えられたりするものと考えているのであり、マルクスが強調した〈直接的・非媒介的-間接的・媒介的〉の区分を捉えないので、次のように言うことになる。「結局、リンネルがほかのすべての商品に直接的な交換可能性をあたえているならば、逆にほかのすべての商品はリンネルに直接的な交換可能性をあたえることができ、ほかのすべての商品がリンネルに直接的な交換可能性をあたえているならば、逆にリンネルがほかのすべての商品に直接的な交換可能性をあたえることができるのである。[…] / […] 貨幣とは、全体的な相対的価値形態と一般的な等価形態というふたつの役割を商品世界のなかで同時に演じている、いや演じさせられている存在なのである」(同、pp.59-60)。このように、直接的交換可能性を与えたり与えられたりする双方向的関係があると考えることによって、彼固有の循環形式をとる価値形態Zが生み出されることになるというわけである。この議論がまやかしであることは明らかである。貨幣によって商品は買えるが、商品によって貨幣は決して買えはしないのである。彼が、商品の貨幣に対する優位性が現われ出ると考えるスーパーインフレーションの事態にあっても、商品によって貨幣を買うわけでは決してないのであって、ただそこでは貨幣が貨幣としての機能を喪失し、ほとんど物々交換の状況に回帰しているだけのことなのである。ところで岩井は、先に述べた久留間が指摘した誤訳問題について「笑うに笑えぬ喜劇」(同、p.38、同、p.44)とこきおろしているが、この「直接的交換可能性」についての理解を見れば、彼自身もまたその「喜劇」の一役者であることがわかるというものだ。

83) MEGA, II/5, S.40.

84) *ibid.*, S.42.

85) 等価形態の謎性に関して一定の理解を示しながらも、イスラームに対するロマン主義的思い入れによってそれを台無しにしてしまっているのが中沢新一の『緑の資本論』(初出は集英社、2002年)である。中沢は同書ちくま学芸文庫版(2009年)の「まえがき」に次のように書いている。『『資本論』の核心は、その第一巻に展開された価値形態論の部分にある。私はこの本で、その価値形態論をイスラム教の『タウヒード』という存在論の考え方にしながら書き換えてみるとこうなる、という試みをおこなった』(p.5)と。ここで中沢が言う「イスラム教の『タウヒード』という存在論」がどのようなものであり、それを中沢がいか理解しているのかについては後に検討するとして、先ず、『資本論』の価値形態論を中沢がいか書き換えたのかについて見てみよう。

中沢は『資本論』を当然のことだが現行版で読み、価値形態論を貨幣生成論として捉えている。だから彼が言う価値形態論の書き換えとは貨幣論としての書き換えである。その貨幣について中沢は、「カトリック的貨幣論とイスラーム的貨幣論が存在」(p.78)するとし、マルクスは前者を根本的に批判することを目指しながら結局その枠内での議論にとどまったと言うのである。だが問題なのは、中沢の貨幣理解の基底である。中沢は貨幣について、本来商品ではないものであるのだが、それが商品になると自己増殖の能力を獲得し、剰余価値と利子を生み出すものになるというきわめて特異な考えをもっている(例えば次のような言明を見よ。「貨幣はそのままでは資本にならない。つまり貨幣は不妊なのである。ところが、貨幣がいったん商品に姿を変えるや、そこには不思議な産出力が宿ようになる」(p.107)、「貨幣が貨幣であるうちは、自己増殖はできない。商品という『キリスト教徒』にならなければ、身に産出性を帯びることなどはできないのである」(p.108))。その上で、マルクスもこれを支持していたと信じ込んでいる。だが彼がその根拠としてあげている(pp.106-107)『資本論』現行版第2編の「第4章 貨幣の資本への転化」の「第1節 資本の一般的定式」の一節(MEW, Band 23, S.169-170. 前掲資本論翻訳委員会訳 p.264)は、彼の考えを支持するものとはまったくならず完全な誤読である。というのは、彼は、資本が貨幣資本・生産資本・商品資本という三つの形態転化をとげつつ運動するものだという理解ができず、資本はまさしく運動する価値、すなわち形態転化——貨幣形態から商品形態へ、そして更に商品形態から貨幣形態へ——の過程を進行する価値、しかも、増殖する価値である、とマルクスが述べた上記の箇所を、商品でない貨幣が商品に転化する過程を述べたものと捉えているからである。ともあれ、中沢は、商品ではない貨幣と商品である貨幣とが存在し、後者が問題なのだとするきわめて特異な貨幣理解に基づいて議論するのであり、本来商品でない貨幣が商品化し自己増殖能力を獲得し、それを現実化する様態をマルクスは描き出したと捉えているわけである。このような『資本論』とはまったく縁のない議論に基づいて価値形態論に向かうのであるが、等価形態の謎性については一定の正しい直観的理解を示している。彼は言う。「貨

幣の萌芽は、この『相対的価値形態』と『等価形態』の不均衡な出会いのうちに発生するのである。このとき、上着のような『等価形態』をとる商品は、『相対的価値形態』であるリンネルの価値を『表現する』地位、つまりシニフィアン¹の地位に立つのに対して、『相対的価値形態』をとる商品は、『等価形態』をとる商品によって『表現される』地位、すなわちシニフィエ²の地位に立つ。そして、いつでも相手の価値を『表現する』地位にある商品が、貨幣と同じ立場に立つことになるわけだ。／この貨幣の萌芽があらわれる原初的な場面において重要なのは、貨幣に結晶していくシニフィアン商品が、シニフィエ商品に対して流動的なアウラを帯びているという点である。〔…〕貨幣の発生³の現場を取り押さえようとする、このマルクスの分析によって際だつのは、貨幣に結晶することになる『等価形態』における商品には、アウラ、流動性、愛（しかもこの愛は不確定性をはらんだ愛である）、意志、欲望などの性質が、あい伴って発生することをあきらかにしていることである」（pp.116-117）。ソシユール言語学から構造主義、そしてポスト構造主義の論者たちに広まった〈シニフィアン-シニフィエ〉といった用語や、「愛、意志、欲望」などの言葉が価値形態の概念的把握を阻害していることは明らかであるが、しかし等価形態の謎性に一定程度正しく接近していることは確かである。まさしくそうであるがゆえに中沢は、ここから、先に示した貨幣に関する特異な理解を無効にする次の言明に行きつく。「貨幣は商品の出会いのうちから発生する『特殊な商品』である。しかも、『二〇ヤールのリンネル=一着の上着』に象徴される商品同士の出会いとおたがいの値踏み⁴の過程には、すでにしてシニフィアンとシニフィエの不均衡がおり、流動性や浮遊性をはらんだシニフィアン商品はそれ自体のなかに、すでにして価値増殖ということがおこるために必要な能力がそなわっている。したがって、貨幣が商品形態をとったとき、はじめて価値増殖への運動が可能になるという最初の言い方は、半分しか正しくないことになる。貨幣は特殊な商品として、すでにして自らのうちに増殖性への秘められた意志を潜在させており、その意志はシニフィアンとしての商品に内在する流動性、浮遊性によって、すでに準備されてあったと言える」（pp.117-118）。中沢はここで實際上、商品でない貨幣が商品になるのではなく、商品世界が商品の一形態である貨幣を生み出すのであるという正しい理解に至っている。「半分しか正しくない」ではなく「全部正しくない」ことを中沢自身が自らの行論によって明らかにしてしまったのである。だが中沢は、この論理的な不整合を正す方向に向かうことなく、イスラームへの思い入れから、ロマン主義的・情緒的議論に身を委ねることになる。例えば次のように。「イスラームなら、冷静にこう言うだろう。商品に内在する『聖霊』の働きを除去することは、人類に可能である。イスラームの実験が、それを歴史的に証明してきたではないか。タウヒードによって、貨幣から発生する毒は消すことも可能なのだ」（p.112）、「イスラームは一神教の原理に忠実に、貨幣や商品の中にセットされたシニフィアンの部分を『魔術的』に操作して、そこから不平等な利潤を獲得することを、厳に禁じてきた。とりわけそれは、『二〇ヤールのリンネル=一着の上着』という、商品交換のもっとも原初的な場面において何気なく作動をはじめ、商品としての貨幣を生み出すばかりか、その貨幣が貨幣を生むようにして、価値増殖の過程がはじまってしまうという、深淵微妙な経済学的分析を深く理解していたかのように、この原初的な場面においてまず、資本主義への道を固く閉ざそうとしてきたのである」（p.130）、「イスラームとは、その存在自体が、一つの『経済学批判』なのだ。原理としてのイスラームは、巨大な一冊の生きた『緑の資本論』である」（p.133）、「タウヒードの論理は、『資本論』が立脚している『価値』の考え方よりも、はるかに奥行きのある拡張された価値の考え方を生み出してきた。マルクスの考えでは、人間が自然に働きかけをおこなったときに、価値は発生する。それを労働と呼ぶことにすれば、モノに込められた人間労働が価値をつくりだすのである。商品社会では、そういうモノが同じ価値をもつほかのモノと交換され、そこに交換価値が発生する。／〔…〕／イスラーム経済の基礎をなすタウヒードの論理からは、キリスト教の西欧で発達した労働観、価値論、交換論などを総合した（止揚した）ところにつくられたマルクスの価値形態論とは、根本的に異質な価値論が育ってきた。〔…〕タウヒードの論理にしたがえば、絶対者の表現であることが『価値』であり、その価値にははじめてから贈与の論理が組み込まれているために、モノ同士の等価交換も厳密なことをいえば、なりたたないのである」（pp.6-7）。このように、きわめて通俗的で不正確で誤った『資本論』理解の上にこうした情緒的なイスラームへの思い入れが積み重ねられ、他方で、マルクスへのグチが語られる。「古典派経済学の根底的な批判をめざしたのが、マルクスの『資本論』だったはずである。それを徹底的に遂行するためには、マルクスは古典派の経済論に内在する『三位一体』的な思考様式を完全に相対化した、まったく新しい『外部』の思考様式で、経済現

象の分析に臨まなくてはならなかったはずである（たとえば、タウヒード経済論のような仕方）。ところが、マルクスはそうしないのである」（p.105）。まさしくマルクスは、中沢が望むような仕方でも考えず、資本主義に真向ったがゆえに、〈価値－商品〉への根源的批判を遂行し、労働価値説批判－経済学批判をなしとげたのである。以上から、中沢は『資本論』の価値形態論の書き換えを行なったなどとはとても言えず、ただ単に『資本論』に対してイスラームへの我流の解釈にもとづくロマン主義的・情緒主義的思い入れを外的に対置しただけであることがわかる。

では、中沢が思い入れているイスラームのタウヒードの理論、またそれに基づくとされるイスラームの経済・金融理論について検討しておこう。まず、タウヒードについては、黒田壽郎『イスラームの構造——タウヒード・シャリーア・ウンマ』（書肆心水、2004年）によれば、次の通りである。

「〔…〕タウヒードとはさまざまな事象を〈一〉を介して理解する原則であり、〈一化の原理〉と訳されるものである。〔…中略…〕／タウヒード論の徹底化は、〈一化の原理〉が、神の唯一性にのみ適用されるのではなく、それが存在界の分析にも活用される契機となっている。万物は同じ神の手になっているため同根であり、それゆえすべて等位にある。そしてそれらは同時にすべて差異的であり、さらに互いに密接に関連しあっている。タウヒードの論理は、万象の等位性、差異性、関係性という三原則を徹底させ、それに基づいて特徴あるイスラームの現世観を作り上げているのである」（同書、序章、pp.22-23）。「ゲゼルシャフトは確かに国民国家、資本主義等を媒介にして社会関係を合理化する側面を持っていた。しかしそれが無視し、軽視してきたのはとりわけ私生活の側面に収斂する無償のものの重要性、役割である。例えば夫婦、家族という単位の内側では、あらゆる行為は無償である。そこではすべての成員が、互いに行為を贈与し合うことによってチームワークを創り上げるが、その根拠はまさにこの無償性に他ならない。親密なもの、親しい間柄を創り上げる基礎は、もっぱら報酬を超えたものであり、人間はこれを欠いては存在すること自体が無意味である。しかし現在の商品化、有償化という同一律の横行は、この親密さの根拠を犯し、存在そのものの瑞々しさを干涸びさせてはいないであろうか。／ところでこのような無償性とは、決して価値の欠如と向かい合っているものではない。事態はむしろ正反対で、向かい合う対象に計算の可能性を超えた価値、意味を認めることを基礎としており、その掛け替えのなさはもっぱら対象の差異性に由来するものなのである。〔…中略…〕ところでこの世に存在するものみなは、タウヒードの世界観が示唆するようにすべて差異的であり、その本性を窮め尽くすことができないほどの深み、秘密を湛えてはいないであろうか。差異性を一義的なものと捉える者にとって、この世には基本的に等価交換されうるものなど何一つ存在しない。そしてあらゆるものは、その差異性のゆえに観察者の予想を上回る秘密を開示するのである」（同上、終章、pp.346-348）。黒田の示すところでは、それが「イスラームの根幹をなす」にしても、あくまで「タウヒードの原理」は理念にほかならない（序章）。その理念からある種の間人主義が展開され、資本主義的な意味での社会性を有する価値と、倫理的なそれとが弁別されぬまま、差異性による等価交換への純粹素朴な「批判」がなされている。この論の運びは、中沢の『緑の資本論』での「タウヒード」賞賛ときわめて似通っており、平易なうえに人間主義的な熱に満ちているので、つい賛同する者もいるかもしれない。しかし、本来的な差異を「分かち合う」諸物が等価交換される転倒状況そのものは、「タウヒード」を外挿することで解消されるはずもなく、さらにここで述べられる等価交換（翻せば差異性）は時間性を持たない静的・実体論的な取引でしかない。そのため残念ながら、空間を時間で絶滅させながら自ら増殖する価値＝資本の圧倒的な等価の強制力には決して対抗しえないのである。そして言うまでもなく、架空資本のグローバルな暴力性は、ここでの「批判」の枠外に厳然と存在している。次いで、「イスラーム金融」について述べる。なぜなら、「イスラーム金融」「イスラーム銀行」についての現実と議論とを踏まえなければ、「タウヒードの原理」は〈いま・ここ〉での現実性をもちえないからである。イスラームにおける〈一化の原理〉は、価値増殖すなわち利子を生み出すマネーを、西欧の利子（interest）・高利（usury）という法理的には元本債権から派生するものとして捉えられるものよりも理念的に広義に考えている。取引における対価の等価性を逸脱するものを「リバー」と呼び、包括的に禁じられるべきものと措く（両角吉章『イスラーム法における信用と「利息」禁止』羽鳥書店、2011年、pp.55-69）。この事態を現代世界での問題として考えると、「イスラームは宗教というよりもむしろ、史上初の巨大コンツェルンの定款である」（H. G. ベーア）という端的な指摘が正鵠を射ているように、理念と現実との乖離にイスラーム金融システムがどのように対応しているかが「タウヒードの原理」との整合性におい

て審問にかけられている。小杉泰がいみじくも述べるように、イスラームの教義体系に経済行為が主要なメタファーとして用いられている、すなわち経済が宗教（普遍宗教であり生活戒律でもある）に入れ子構造のように組み込まれている（小杉泰『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会、2006年、p.99）。

じっさい、理念と現実の衝突として、イスラーム金融機関会計監査機構（AAOIFI）やシャリーア諮問評議会などのイスラーム金融諸制度においては、現実主義的リバー限定容認論と理念主義的利子＝リバー否定論が相半ばしていると、気鋭のイスラーム研究者・長岡慎介は述べる（長岡慎介『現代イスラーム金融論』名古屋大学出版会、2011年、第2章・第3章）。さらに長岡はカール・ポランニーの言葉を転用して、イスラーム金融を「現物経済に埋め込まれた金融システム」と表現し、現代においては金融手法の「序列化」と「重層化」によって、信用創造をリバー禁止に出来る限り抵触せずに可能にしているとする（同上書、pp.200-204.）。だがこれは資本主義の現実の力が理念に変更を迫った結果にほかならず、長岡の主張はポランニーの指摘と同様に、価値増殖（とりわけ利子生み資本形態におけるそれ）の解明をまったく欠いている。長岡とその師である小杉泰は、イスラーム金融システムあるいはイスラーム銀行を、西欧金融システムを相対化し、より望ましいオルタナティヴを提示するものと評するが（小杉・長岡『イスラーム銀行』山川出版社、2010年、pp.107-114）、その「根拠」はサブプライム・ローン危機－リーマン・ショックが与えた悪影響の規模が欧米などの金融機関と比較して相対的に小さかったという結果論にすぎず、悪影響が同じく相対的に小さかった南アフリカや中国などとの比較なしの賛美は、グローバル金融システムにおけるトランスナショナルなイスラーム金融システムの位置づけを曖昧化させる以外の結果につながりはしない。さらに、欧米ほどとは言えないにしてもやはり相当の金融危機の影響を被ったことや、コモディティ・ファイナンスのイスラーム版ともいえる「コモディティ・ムラーバハ」の登場、金融商品のシャリーア適合性と格付けを行う「株式会社」がイスラーム世界の只中に無数に設立されてきていることを考えると、イスラーム金融は、グローバル・システムの単一性を同質なものではないように機能する点で、みごとに欧米型システムとの間に相補性を構築してきているといえる。つまり総括的に見るに、中沢の主張は独自のものでないだけでなく、イスラーム金融の現実をも無視したロマンティックな観念論にすぎない。彼がいみじくも自著につけた象徴の色である「緑」は、イスラームの緑ではなく、増殖の果てに過剰な富栄養化をとげた有毒渦鞭毛藻（*Pfiesteria piscicida*）の、あるいはアメリカ合衆国紙幣の色とするのがせいぜいだらう。

86) MEGA, II/5, S.33-34.

87) *ibid.*, S.34.

88) MEGA, II/6, S.89-90.

89) MEGA, II/5, S.50.

90) *ibid.*, S.35-36. ここで、マルクスは商品所有者に言及しているが、それに特別の意味を与えているわけではない。商品を価値関係に置くのは当然ながら商品所有者であるが、価値形態論の議論の前提としてそれが語られているだけである。

91) *ibid.*, S.37.

92) ここで、エンゲルスとの共著『聖家族 別名 批判的批判の批判 ブルーノ・パウアーとその伴侶を駁す』におけるマルクスのヘーゲル批判、すなわちヘーゲルの実体たる“果実なるもの”に関する一連の言明が思い起こされる（MEW.2, S.59-63. 前掲『マルクス＝エンゲルス全集』第2巻、大月書店、1960年、pp.56-60、『聖家族 別名 批判的批判の批判 ブルーノ・パウアーとその伴侶を駁す』「第5章 秘密を売る小商人としての『批判的批判』あるいはセリガ氏としての『批判的批判』」（当章はマルクス執筆）の「2 思弁的構成の秘密」の部分を参照のこと）。このマルクスのヘーゲル批判は根源的かつ辛辣きわまりないが、しかしそれはあくまでヘーゲルの理念に対する批判である。この批判を現実に対する批判として措定したのが、〈社会的実体－価値実体〉という概念である。

93) 一方のスターリン主義派の見解の特徴は、価値を価値実体、すなわち労働の方に重ね合わせて捉えるという点にある。しかもマルクスが生きた労働（商品に表わされた・対象化された労働についてではなく）の一方の側面について与えた規定、すなわち、「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品－価値を形成するのである」（MEGA, II/6, S. 79-80）という規定を商品に対象化・表わされた抽象的人間労働に重

ね合わせ（生きた労働と対象化された労働との混同）、かくして価値実体としての抽象的人間労働を超歴史化し、価値を労働一般、人間の労働一般に重ね合わせるることとなる。ここでは実体は社会的実体ではなく徹底して自然的実体として捉えられている。文字通りの・徹底した労働価値説であり、更に〈労働＝価値〉を革命の主体＝プロレタリアートに重ね合わせ、実現すべき価値を労働者階級が担っていると考えるのである。マルクスが労働価値説批判としてスミス、リカードゥ等の労働価値説を批判したことが完全に捨て去られている（前掲D. ローゼンベルク『資本論註解』第一巻、前掲ソヴェト同盟科学院経済学研究所『経済学教科書』等を参照のこと）。

他方の人々としては、廣松渉、柄谷行人、岩井克人等がいる。論者によって、実体の否定と価値の関係概念化の手法や程度に相違があるが、いずれも社会的実体と規定されている点が理解されておらず、その批判的意義がまったく捉えられていない。例えば廣松は次のように述べている。「そもそも『抽象的人間的労働』とは何であるのか？ 果してそういうものが実在するのか？ 実在すると強弁するとき、それは形而上学的・超自然的な実在を提出することにならぬか？ そういう“わけのわからぬしろもの”の『凝結』とはいよいよ珍奇であろう。『抽象的人間的労働』の何たるかが明確に規定されない限り、そもそもマルクスの価値論全体が“誤魔化”しになってしまう。それは、かの第三者、つまり、交換される二商品がそれに還元される共通者なるものを要請し、労働の生産物に論点を“移動”し、この場面であらためて要請した『第三者』『共通者』たるにとどまる。抽象的人間的労働の何たるかを積極的に規定しえなければ、“正体不明の第三者”の存在場面を他の場面に移動させただけに終る。あらためて設問しよう。一体抽象的人間的労働とは何か？ / [...] 抽象的人間的労働なるものはどこにも実在しない。況んや、それが『凝結』するなどということは現実的な過程としてはありえない（『マルクス主義の地平』勁草書房、1969年、pp.226-227）。われわれが本稿〈Ⅲ〉で検討した「共通なもの」と「第三のもの」との区分がなされておらず、だから価値と価値実体とが混同されているのみならず、そもそも過程の主体が商品であることが押さえられていない。こうした無意味な疑問が出される背景として、社会的実体という点が捉えられておらず、マルクスの価値実体への批判の意義が理解されていないということがある。こうした社会的実体への拒否・否定から廣松は「抽象的人間的労働なるものが在って、それが文字通りの意味で凝結して、価値なるものに転成するわけではない。普遍的抽象的な主体＝実体として、それが自己外在態に転変して価値実体と成る或るもの、そのような etwas として表象されているところのものは、いかなる関係規定の屈折した投影であるか。従ってまた、価値実体ということで私念されているところのものの真実態は何であるか」（前掲『資本論の哲学』p.191）と問題を設定し、「人々は、価値実体なるものが先ず在って、それが第二次的に諸関係をとり結ぶかのように表象しがちである。また価値現象体のうちに普遍的な価値本質、ないし、価値実体が潜んでいるかのように思念する。しかし、人々が価値実体として思念しているところのものは、実は、かの間主体的な機能的諸関係の結節を自存化したものにほかならない。[...] 人々が普遍の本質として私念しているところのものは、実は、間主観的に一致して gleichsetzen されている機能的関係（これは多岐多様であり、それぞれしかるべき歴史的・社会的、そしてまた自然的な根拠をもつ）を物性化して事物に凝縮的に帰属させたものにほかならない」（同前、p.195）と結論付けるわけだが、この難解な表現で言われていることは、きわめて単純化して言えば、資本主義的な商品生産社会の中での、人々の社会的分業体制における位置・役割・機能等々を廣松特有の「間主体的」とか「間主観的」とかで表現した、廣松の学的意識過程への反射でしかない。社会的分業体制は明らかに社会的実体としてとらえられるであろうし、だからその社会的実体の社会的意識過程への何らかの反射として、抽象的人間労働と、その凝結ということを廣松は考えていることになる。

94) MEGA, II/5, S.42.

95) *ibid.*, S.42. この一句の前には次の文章がある。「われわれの現在の立場においては一般的な等価物はただけって骨化されてはいない。どのようにして実際にリンネルは一般的な等価物に転化させられたのであろうか？ それは、リンネルが自分の価値をまず第一に一つの個別的商品において示し（形態Ⅰ）、次にはすべての他の商品において順次に相対的に示し（形態Ⅱ）、こうして逆関係的にすべての他の商品がリンネルにおいて自分たちの価値を相対的に示した（形態Ⅲ）、ということによってである。単純な相対的な価値表現は、リンネルの一般的な等価形態がそこから発展してきた萌芽だった。この発展のなかでリンネルは役割を変える。リンネルは、その価値の大きさを一つの他の商品で示すことをもって始め、そし

て、すべての他の商品の価値表現のための材料として役だつことをもって終わる」と述べ、これに続けて、「リンネルに当てはまることは、どの商品にも当てはまる」と述べられるのである。これを見ると、初版本文の価値形態論における形態ⅠからⅢへの過程が決して歴史的な発展過程ではなく、論理的な展開過程であることが、このうえなく明瞭になる。リンネルを例とした形態ⅠからⅢへの過程がどの商品にも当てはまる、と言われているのだから。この点で、第二版（第三版、そして現行版）の価値形態論は明らかに貨幣生成の歴史的発展過程として述べたものになってしまっており。論理的に問題があることがよくわかる。この点に関する初版本価値形態論と第二版の価値形態論との詳細な比較分析は〈Ⅴ〉の(ii)で行なう。

96) *ibid.*, S.43.

井上 康（京都精華大学 非常勤講師）

崎山 政毅（本学国際文化学域文化芸術専攻教授）